十全同窓会会報 184

2023／5

目　次 | CONTENTS

卒業生に贈る言葉……3
就任挨拶……4
退職のご挨拶……8
退職記念講演会……10
受賞……12
病院紹介……16
教室だより……18
金沢から世界へ発信……20
医師国家試験結果……21
支部だより……22
金沢大学医学生と「生と死」を考える……24
十全昔話……26
学生コーナー……30
令和5年3月卒業者進路 …31

2023年度　金沢大学医学部十全同窓会総会

日　時　2023年7月1日(土)　午前9時～
場　所　十全講堂

式次第
一、開会の辞
一、議長選出
一、議長挨拶
一、物故会員に対する黙祷
一、報告　　中村　裕之　理事長
一、医学系・医学類報告　　杉山　和久　医学系長・医学類長
一、医薬保健学総合研究科報告　　堀　修　医薬保健学域・研究域長
一、先進予防医学研究科報告　　田嶋　敦　先進予防医学研究科長
　高安賞贈呈式
一、支部紹介
一、議案審議
　(一)2022年度事業及び決算報告
　(二)監査報告
　(三)2023年度事業計画及び予算(案)
　(四)役員改選
　(五)会則改訂
　(六)その他
一、閉会の辞

《学長メッセージ》午前10時～
　金沢大学未来ビジョン「志」　　金沢大学長　和田　隆志

《教授就任記念講演》午前10時半～
　肺がん薬物療法の耐性克服への挑戦　　呼吸器内科学　矢野　聖二　教授
　肝発癌の分子機構と新規診断治療薬の開発に向けて　　システム生物学　山下　太郎　教授
　胸部悪性腫瘍に対する拡大手術と低侵襲手術の融合を目指して　　呼吸器外科学　松本　勲　教授

◇教授就任講演は、医薬保健学総合研究科博士課程の「Up-to-dataセミナー」として認定します。
◇石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴ください。

卒業生に贈る言葉

医学類長
杉山　和久

ヒューマニティーあふれる医師になりましょう！

卒業生の皆さん、金沢大学医学類のご卒業、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。これから研修医としての新しい生活がスタートします。今までの医学生としての勉強は医師になるための準備であり、これからが医師としての実地の勉強です。卒業生全員が同じスタート台に立ったと言えましょう。「継続は力なり」という言葉があります。何事も諦めずに続けることが重要で、自分の人生をかけたライフワークとなる仕事を見つけたら、これは素晴らしいことです。

病気ではなく
病気を持った患者を治す

当医学類と私の所属する眼科学教室の礎を築いたのは、本学の前身である旧制金沢医科大学の初代学長であり、高安病を発見した高安右人先生（眼科教授）です。本学の長い歴史が物語るように、臨床も研究も発展のためには継続性が重要です。勿論、時代に合わせた変革も、時に必要でしょう。私としては今できることを精一杯やって、次の世代を担う若い皆さんに期待したいと思います。私としては、皆さんに、「病気ではなく、病気を持った患者を治す医師」、ヒューマニティーにあふれた医師になって欲しい気持ちで一杯です。昨年、自分が病気をしてこれをより強く思うようになりました。

医学教育は卒業した後が大事

医学教育は卒業した後が大事です。特に、入局後の専門研修では、専門医を取得するために必要な内容を学ぶため、力を入れてください。医師国家試験はほとんどの学生が合格しますが、専門医の取得試験の合格率は７～８割程度です。学会に参加したり、論文をまとめたりするほか、筆記試験に面接と大変ハードルが高いと思います。専門医の資格を取得した後、さらに高度な知識や技術を学ぶ必要があるため、一人前の医師になるには、医学部卒業後10年はかかると思います。勿論、大学院に進んで本格的に研究を行い医学博士の学位を取得することも重要です。頑張ってください。

すべては人との出会いから

私の金沢大学の学生時代の思い出は解剖学実習です。とても厳しい教授（故山田到知先生）の指導で、神経や血管の三次元構造を、夜中までかかってスケッチしました。つらかったですが、後に人体構造の形成原則や発生学の面白みが分かってきて、この実習の意義が理解できたのは医師になってからでした。金沢大学を卒業後に、そこで出会った恩師から、臨床医でも基礎医学を学ぶことの大切さを教わりました。他大学の解剖学教室に国内留学をして、そこで出会った教授と大学院生（現川崎医大解剖学教授）に、灌流固定に始まって、組織の切片の作り方、電子顕微鏡の使い方、血管鋳型標本などを学びました。さらに渡米して緑内障の基礎研究に没頭し、米国でも師となる素晴らしい教授にめぐり会えました。師との出会い、友との出会いが私の人生にとって、大きなプラスになってきたのだと思います。こうした私自身の経験を踏まえて、若い皆さんには学生時代や卒業後の友人や尊敬する先生との出会いを大切にしてほしいと思います。特に医学類の６年間で知り合った人は、医師になってからも一生付き合うことになる人たちです。また、他大学や海外の先生との交流を通じて一生の友達をつくってほしいと思います。

ポジティブ思考が成功の鍵

最近の若い人の中には、人とのコミュニケーションが苦手な人も少なくないでしょう。一生の友を得るための秘訣として、私のアドバイスは、人の言うことを悪く解釈せずに、ポジティブ思考で接することが大切だと思います。言葉には二面性があり、言われたことをアドバイスと受け取るか、ネガティブ（否定的）に受け取るかで、その後の展開は全く違ってくるでしょう（前愛媛大学解剖学教授、故上原先生の言葉）。人の良い面を受入れて、何でもポジティブに受け取ることが、人生の成功の扉を開く鍵ではないかと思います。

就 任 挨 拶

松本　　勲　博士
（平成3年卒業）

世界に通じる academic surgeonの 育成に努める

この度、令和5年1月1日付けで金沢大学医薬保健研究域医学系呼吸器外科学講座の初代主任教授に就任いたしました。

金沢大学医薬保健研究域医学系呼吸器外科学教授に就任

私は平成３年に金沢大学医学部を卒業し、金沢大学第一外科教室に入局いたしました。肺門部進行肺がんに対する「体外肺切除術の安全性に関する実験的研究」で学位を取得し、呼吸器外科学のダイナミズムや奥深さを実感しました。大学院卒業後は外科医として研鑽を積んだ後、平成15年本学に帰学し、本格的な呼吸器外科学の道を歩み始めました。平成26年から呼吸器外科科長に就任し、先進総合外科学（旧第一外科）竹村博文教授のご指導の下、研究・臨床・教育に取り組んでまいりました。

研究面では、臓器移植・再建・再生、低侵襲治療、胸部悪性腫瘍制御、新しい手術治療法・検査法の開発、の4基軸で研究を進め、産学連携も積極的に行ってきました。

臨床では、胸腔鏡、ロボットなどの低侵襲手術を推進し、一方で、進行悪性腫瘍に対しては、大動脈・椎骨合併切除、サルベージ手術などの拡大手術を多数行い、他施設をリードしています。今後も新しい手術・検査法を開発し、肺移植導入の礎も作りたいと考えています。

教育面では、講義のほかにセミナーなどを通して、学生・研修医に呼吸器外科学の魅力を伝えるとともに、「自分が診てもらいたい」と思う医師像を目指すよう啓発したいと考えています。また大学院教育なくして科学的思考を有する優秀な研究者・臨床医の育成は困難ですので、臨床に立脚した基礎的・臨床的研究を推進し、世界に通じるacademic surgeonの育成に努めます。

金沢大学十全同窓会の先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何とぞお願い申し上げます。

笠原　寿郎　博士
（昭和61年卒業）

日本医科大学呼吸器内科学教授に就任

後進の教育と肺がんの治療開発に精進

この度、令和4年6月1日付をもって日本医科大学呼吸器内科学教授、がん診療センター長、化学療法科部長を拝命いたしました。金沢大学医学部十全同窓会の皆さまに謹んで就任のご挨拶を申し上げます。

私は昭和61年に金沢大学医学部を卒業し、直ちに松田保教授が主宰されました第三内科に入局いたしました。呼吸器内科、血液内科の研修を積み、井波厚生病院（現南砺市民病院）、福井循環器病院、公立能登総合病院で呼吸器を中心とした内科診療を行いました。その後、平成元年から国立がんセンター薬効試験部で西條長宏先生のご指導のもと肺がんの基礎研究に従事いたしました。抗がん薬耐性機序の解明と耐性克服、新規治療の開発を学びました。金沢市立病院での勤務ののち金沢大学に戻り、肺がんの臨床試験を行いました。21世紀になり臨床応用された分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬の治験に多く参加し、新たな治療開発に携われたことは非常に幸せだったと思います。

今回ご縁がありまして、日本医科大学で教授職を得ました。日本医科大学は1876年長谷川泰先生により設立された済世学舎を前身とする日本でもっとも古くからある私立医科大学です。著名な卒業生には野口英世博士や、金沢大学の前身である旧制金沢医科大学学長を務められた須藤憲三先生がいます。呼吸器内科の伝統も深く、医局員は明るく溌溂と臨床・研究・教育に頑張っています。私が金沢大学で培った経験・知識を活かして後進の教育を行いつつ、まだ難治である肺がんの診療や新規の治療開発に精進したいと考えています。金沢大学医学部十全同窓会の皆さまには今後もご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

高倉　正博　博士
（平成5年卒業）

金沢医科大学産科婦人科学教授に就任

ヒューマニティーに富んだ医師の養成と地域の周産期医療の堅守を目指す

この度、令和5年4月1日付で金沢医科大学産科婦人科学の第4代教授を拝命いたしました。私は平成5年に金沢大学医学部を卒業し、産科婦人科学教室に入局いたしました。関連病院での臨床研修の後に帰学し、井上正樹前教授、京 哲先生（現島根大学産科婦人科教授）の指導のもと婦人科腫瘍医としての臨床と分子生物学的手法を用いたがん研究の手ほどきを受けました。学位テーマであった不死化関連酵素テロメラーゼ研究の繋がりで平成15年から2年間米国テキサス大サウスウエスタンメディカルセンター細胞生物学部へポスドクとして研究留学いたしました。帰国後は婦人科腫瘍の臨床と研究に携わる一方で、平成18年より5年間、医局長として医局運営に携わりました。平成25年に藤原浩教授が赴任されてからは悪性腫瘍などに対する腹腔鏡手術の指導をいただくと同時に、周産母子センター勤務となり周産期分野をメインの仕事とすることで産婦人科医として視野を拡げることができたと思います。平成29年に金沢大学産科婦人科出身であった笹川寿之教授のお誘いもあって金沢医科大学産科婦人科に准教授として赴任いたしました。金沢医科大学においては、臨床面では関連他科の先生方のご協力を得て低侵襲手術を導入しそのカバー範囲を拡げております。また研究面では、子宮内膜がんの発がん機構に関する研究とリキッドバイオプシーに関する研究を進めております。

創立50周年を迎えた金沢医科大学産科婦人科学講座主任として金沢大学とともに石川県の周産期医療の大きな問題である奥能登地区の産科医不足の解消を始めとして、地域に安心・安全の産婦人科医療を提供するともに、ヒューマニティーに富んだ医師の養成に尽力する所存です。甚だ未熟ではございますが、同窓会の諸先輩方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

川原　範夫　博士
（昭和58年卒業）

患者さんに寄り添った医療を実践

2023年4月1日に金沢医科大学理事長の高島茂樹先生から大学病院長を拝命いたしました。任期は3年です。現在、金沢大学病院長である蒲田敏文先生やこの4月に横浜栄共済病院病院長に就任した土屋弘行先生とは大学の同期です。国家試験準備のグループ学習ではいろいろと教えてもらいました。小生は金沢大学名誉教授の富田勝郎先生の下で脊椎脊髄外科を研鑽したのち、2010年4月に金沢医科大学整形外科に奉職いたしました。2013年9月から当時の勝田省吾学長のもとで学生部長を4年間務め、2017年9月から当時の神田享勉学長の下で医学部長を2期4年間務めました。

また2021年10月からは当時伊藤透病院長のもとで危機管理及び診療情報担当の副院長を務めておりました。2022年9月から宮澤克人学長の下での副学長を兼任しており、先日この十全同窓会報にご報告申し上げたところであります。

金沢医科大学病院は1974年9月の開院以来「生命への畏敬」を医療活動の原点とした病院の理念に基づき、特定機能病院として高度先進的な医療を提供してまいりました。現在ポストコロナの医療収入、働き方改革など病院が直面する問題は山積みですが、精一杯取り組んでいこうと思っています。やはり私たちとしては患者さんに寄り添った医療を実践することが最も重要と考えています。

十全同窓会の皆さまには医学教育、診療の両面にわたり、大変お世話になっております。改めて感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

金沢医科大学病院病院長に就任

土屋　弘行　博士
（昭和58年卒業）

母校の名に恥じぬ医療・社会貢献に邁進

2023年3月31日をもって金沢大学医学系整形外科学講座教授を退職し、4月1日より、国家公務員共済年金組合連合会・横浜栄共済病院の病院長に就任いたしました。また、2018年7月から4年間は、十全同窓会理事長を務めさせていただきました。十全同窓会会員の皆さまには、長きにわたりご指導ご鞭撻を賜り深く感謝申し上げます。

横浜栄共済病院の開院は1939年（昭和14年）と、横浜南部医療圏の病院の中ではとりわけ古く、海軍燃料敞に務める職員と家族のために設立された大船海軍共済組合病院がはじまりです。終戦に伴い、地域のための病院として再出発した後、当院の母体である国家公務員共済組合連合会に運営が引き継がれ、全国において地域医療の中核となる32病院を持つグループ病院の一員となりました。以降、高齢化などの人口動態の変化や時代に寄り添った医療提供を行うべく、救急医療や高度専門医療といった病院機能の向上に努め、地域の基幹病院・総合病院として長らく地域のみなさまに親しまれてきました。この間、関東地方における金沢大学医学部の関連病院として、医師の派遣につきまして多大なご支援を賜り、この場をかりて深く感謝申し上げます。

当院では、「やすらぎと 質の高い医療を 心のこもった技術で届けます」の病院理念の下、一人ひとりの患者さんへ安全で質の高い総合的なチーム医療の提供に日々努めております。心疾患（心筋梗塞、心不全等）や脳神経疾患（脳卒中等）については24時間365日体制で専門治療を提供し、がん治療については診断から治療（手術、化学療法、放射線治療）まで集学的治療を提供しています。また、高齢者の外傷救急（骨折等）や運動器疾患に対する医療需要も年々高まっており、今後は整形外科領域の体制を拡充し、高齢になっても安心して暮らし続けられる地域社会づくりに貢献していきます。

超高齢社会を迎え、患者さんが急性期治療から外来通院、在宅医療、介護サービスまで切れ目なく医療やサービスが受けられるよう、当院が果たす役割は今まで以上に多様化しております。今後も、当院が構築した地域医療ネットワークを軸に地域のニーズに引き続き応えられるよう、そして、「選ばれる病院」、「地域と社会に貢献できる病院」、「良質な医療を提供できる病院」として、さらに進化してまいります。また、医療技術の進歩や社会の変化にも対応し、常に最新の医療設備を導入することで、より高度で質の高い医療を提供することを目指していきます。

今後とも、皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

横浜栄共済病院病院長に就任

金大病院公式キャラクター“キリちゃん”

病院前の“のとキリシマツツジ”とマツ

“キリちゃん”を掲げる作者の増田涼香さん

金沢大学附属病院の公式キャラクターが誕生しました。病院のイメージキャラクターを作って欲しいという要望が多く寄せられたのがきっかけです。そこで金大病院の教職員や金沢大学の学生を対象にデザイン案を募集しました。58点の案が寄せられ、インターネットによる投票で11点を選びました。金沢市出身のアートディレクターの水口克夫さんと共に最終選考会を開き、満場一致で“キリちゃん”を選びました。

作者は医学類6年の増田涼香さんです。増田さんは、「病院前に植えられている“のとキリシマツツジ”をモチーフに考案しました。患者さんと病院職員の皆さんを癒やしてくれる、元気いっぱいの“キリちゃん”です！」という言葉を添えて応募してくれました。増田さんの原案をもとに水口さんが医師バージョン、看護師バージョンなど４つの“キリちゃん”を完成させてくれました。写真は医師バージョンの“キリちゃん”です。増田さんにどうしてこの案を考えたの？と聞きました。私（蒲田）が講義の最初のスライドで病院正面に植えたツツジとマツについて熱く語っていたので、「ツツジが病院のシンボルなんだ」と思ったそうです。うれしいですね。

4月からこの公式キャラクー“キリちゃん”を広報物に使用します。また、新たなグッズの作成も企画しています。作者の増田さんは医師国家試験に合格し、4月から金大病院で医師として臨床研修をスタートしました。“キリちゃん”と一緒に頑張って欲しいですね。

お見舞い

能登半島沖地震、千葉県南部地震
被災された皆様ならびにそのご家族の皆様に
心よりお見舞い申し上げます。

金沢大学医学部十全同窓会

退 職 の ご 挨 拶

金沢大学医薬保健研究域医学系
放射線科学
蒲田　敏文

令和5年3月末をもって金沢大学医薬保健研究域医学系 放射線科学教授を定年退職しました。十全同窓会会員の皆さまには教授在籍中大変お世話になりました。紙面をお借りして御礼申し上げます。

私は昭和58年に金沢大学医学部を卒業し、高島力教授の主宰する放射線科に入局しました。関連病院に出向していた４年間を除いて36年間にわたり金沢大学で勤務して参りました。平成25年6月に第4代放射線科教授を拝命しました（初代：故平松博教授、２代：故高島力教授、3代：松井修教授）。教授就任時が55歳でしたので、定年までの10年間放射線科教授として頑張ろうと決心しました。特に放射線科の医局員を増やすことが自分の最大の使命だと認識し、教授就任祝賀会や関連病院長会議での挨拶のなかで、定年までの10年間で放射線科医を50名増やすと宣言して、教授職をスタートしました。

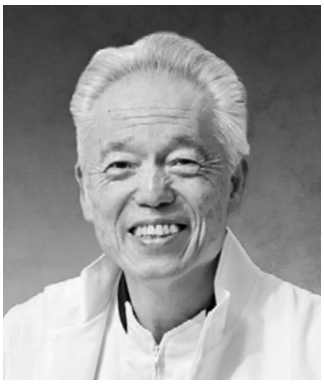
ところが、教授就任4年目に想像もしなかった附属病院長を引き受けることになりました。副病院長などの管理経験が全くない放射線科の新米教授で大丈夫かと同窓の先生方も大変ご心配されたことと思います。私自身も内心は不安で一杯でした。そして思いついたのが3つの日本一のスローガン（日本一きれいな病院、日本一職員に優しい病院、日本一患者さんに優しい病院）です。職員を患者さんより前に掲げたのは、職員が幸せにならないと患者さんに優しくできないと思ったからです。

院長就任から７年が経過しました。この7年間で行ってきたことを簡単に列記します。1）任期付き職員の常勤化、2）病院内のWi-Fiの整備と会議のペーパーレス化、3）院内図書室の整備、4）ヘリポートの整備とドクターヘリの運用開始、5）ロボット手術装置（ダビンチ）の更新、6）奥能登への薬剤師派遣、7）内科・外科の再編、8）第２中央診療棟建設開始、9）新型コロナ感染症対応などを行いました。特にこの３年間はコロナ対応で忙殺されてきたように感じます。5月の連休明けには新型コロナ感染症は二類から五類に変わります。これを契機にコロナ前の診療体制にできるだけ戻れるようにしたいと考えています。

教授就任4年目から病院長になったため、放射線科教授としての務めを十分に果たすことができませんでした。しかしながら、優秀な医局員に支えられてなんとか教授職を終えることができたと思います。放射線科の医局員を50名増やす目標も達成することができました。

この4月からは特任教授として病院長の任期の最後の1年を頑張りたいと思います。

残された課題は沢山ありますが、少しでも改善して次の病院長にバトンタッチしたいと考えています。十全同窓会の会員の皆さまにはあらためて金沢大学医学系ならびに附属病院へのご支援をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。



医薬保健研究域医学系
整形外科学
土屋　弘行

私は昭和58年に金沢大学医学部を卒業し、平成22年4月に整形外科学講座第4代教授に就任致しました。十全同窓会会員の皆さまには、長きにわたりご指導ご鞭撻を賜り深く感謝申し上げます。平成30年7月から4年間は、十全同窓会理事長を務めさせていただき、この間に6年ぶりの同窓会名簿の改訂に携わりました（通常は5年毎の改訂ですが、新型コロナ感染症の拡大により1年遅れとなりました）。医学系キャンパスの航空写真を表紙に使うなど少し工夫を凝らしましたが、同窓会名簿へのいろいろな要望があり、今後徐々にそれは改善されていくものと期待しています。

自分の医師としての歴史を振り返ってみます。医学部卒業後、すぐに整形外科学講座に入局しました。研究意欲も旺盛で大学院医学研究科も同時に入学しました。大学病院で1年間の研修の後、国立金沢病院と福井県立病院で約2年間のローテーションを終えて大学院での研究生活が始まりました。大学院時代はがむしゃらに研究をした記憶があります。これまで、できる限り独創性のある研究を目指してきて、それなりの成果をあげたと感じています。抗がん剤の効果増強、型別コラーゲンによる骨軟部腫瘍の悪性度や分化度の診断、骨延長術を駆使した骨再建術や変形矯正術、液体窒素処理骨移植術、凍結免疫、脂肪幹細胞による運動器再生に関する基礎研究、チタン製インプラントに対する抗菌ヨードコーティングなど大きな注目を集めました。

金沢大学医学部整形外科学講座の教授に就任して以来、皆が誇りと愛着を持つことができる教室にするということを目標として全力を尽くしてきました。そして、“明るく楽しく元気よく”と“夢・挑戦・実現”をモットーに掲げて、邁進しました。基礎も臨床も一流を目指して、国内はもとより、世界にも認められる整形外科学教室としての存在をアピールでき、金沢大学に貢献できたと自負しております。教室員の学会賞、研究助成金受賞、学長賞なども相次ぎ好循環が生まれました。最近の講演では、自分のこれまでの整形外科医人生を振り返って「人生とはなにか？」というスライドを出しています。自分自身の答えは、“自分との戦い、出会いと縁、多くの支え！”です。どのような研究をし、どの方向へ進むのか、諦めるのか続けるのかの決断、そして良き師、良き友、良き弟子、自分の研究の発展につながる新たな技術との出会いと多くの支えが人生に大きな影響をもたらします。

この素晴らしい十全同窓会の益々のご発展と会員の皆さまの益々のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。誠にありがとうございました。

退 職 記 念 講 演 会

日時／令和5年3月18日（土）
場所／十全講堂

蒲田敏文教授と土屋弘行教授の退職記念講演会が、令和5年3月18日（土曜日）14時から十全講堂にて開催されました。新型コロナ感染症の対策を十分にとった上でのハイブリッド開催で、オンライン配信を含めると、非常に多くの先生方に参加していただき感謝しております。

最初の講演者である蒲田敏文教授は昭和58年3月に本学医学部医学科を卒業後、放射線科医局に入局しました。2年間の研修後、富山県立中央病院、福井県済生会病院、黒部市民病院で臨床研鑽を積まれました。昭和63年に助手として大学に戻った後は、腹部の画像診断とIVRを中心に臨床と研究を行ってこられました。この間、平成9年にはアメリカのトーマスジェファーソン大学放射線科に留学され、Donald Mitchell教授

の指導の下、腹部のMRI診断について研鑽されました。帰国後は肝胆膵のCT、MRI診断について臨床研究を進められました。

蒲田教授の臨床研究における功績を要約しますと、次の4つが挙げられると思います。第一は、小膵癌のMRIによる早期発見に関する研究です。この研究は平成6年の北米放射線学会で高く評価され、Certificate Merit Awardを受賞されました。その他にはGroove膵癌の発見、CTによる膵癌の進展度診断の研究、膵癌の肝転移に関する研究が挙げられます。

蒲田教授は学生教育にも熱心に取り組まれ、医学類2年生の画像解剖学、3、４年生の臓器別臨床講義、5年生の臨床実習、6年生の国試対策講義と、毎年多くの講義、実習を担当されてきました。また、平成21年から7年間医王保護者の会の会長を務められ、模擬試験の実施など医師国家試験の合格率向上にも貢献されました。

蒲田教授は若手の放射線科医の育成にも情熱をかけられ、教授在任10年間で50名の放射線科への入局者を獲得されました。また、平成28年から現在まで附属病院長も兼務されており、内科外科の統合や新棟建設、新型コロナ感染症対応などに尽力されました。

蒲田教授はこれまでの放射線科医としての歩みと、病院長就任後の取り組みについて、「病院長になる前、そして、なってから」と題したご講演をされました。蒲田教授は放射線科医、そして教授として長年にわたり金沢大学および医学界に貢献されました。また、先生は強いリーダーシップによって、今まで附属病院をとても良い方向に牽引されてきました。病院運営のみならず、病院を築き上げる「人」を大切にされるのが蒲田先生の特徴です。今後も病院長として我々後輩を指導していただきたいと心から祈念しております。

次の講演者である土屋弘行教授は、昭和58年３月に本学医学部医学科を卒業後、金沢大学医学部整形外科学教室に

入局し、金沢大学医学部附属病院と関連病院で臨床研鑽を積まれました。平成元年に金沢大学医学部の助手としてさらに臨床経験を積む一方、骨軟部肉腫に関する基礎研究・臨床研究を続けられました。また、平成3年にはウィーン大学整形外科学教室および生理学教室に留学され、悪性骨腫瘍の再建や薬物療法の研究を続けられました。

帰国後は金沢大学医学部講師、平成11年には金沢大学医学部助教授として、研究を継続し、国内外の多くの学会で数多くの賞を受賞され、高い評価を得ています。平成22年4月には、金沢大学大学院医学系研究科機能再建学講座教授にご就任になられ、今日に至っています。

土屋教授が残された功績として、多数の新規治療の開発、そして整形外科学教室の国際的競争力の強化が挙げられます。これまでに、骨軟部腫瘍、骨関節感染症、先天疾患、骨折後遺症に対する様々な治療を開発されました。また、金沢大学整形外科学教室は、英語論文数、米国整形外科学会や国際患肢温存学会など主要な国際学会での発表数が日本の整形外科学教室でトップレベルを維持しており、また、教授就任以降に世界各国から132名の訪問者や留学生を受け入れており、このことからも価値のある治療や研究を行っていることが分かります。また、学内外へ指導者を多く輩出され、教室内には明日を担う人材を数多く育成されてきました。

土屋教授のこれまでの研究内容などを中心として「わが『夢・挑戦・実現』－そして未来へ」と題した講義をされました。いつか難治な病気を克服するという夢を追いかけ、基礎研究と臨床研究の両面で挑戦し続け、ついにはその夢を実現して患者さんを治すのが、土屋教授の信条です。土屋教授は整形外科医、そして教授として長年にわたり金沢大学および医学界に貢献されました。今後は本学の関連病院の病院長として、大活躍されることと思います。

（杉山　和久：記）

受　　賞

第60回癌治療学会 優秀演題賞受賞

溝上　敦
（特別会員）
金沢大学大学院医学系研究科
集学的治療分野（泌尿器科）

この度、令和4年10月20日から22日にかけて開催されました第60回日本癌治療学会学術集会におきまして、優秀演題賞を受賞いたしました。謹んでこの研究内容に関しましてご報告いたします。

前立腺癌の早期発見、治療後再発の確認には腫瘍マーカーである血清PSAがしばしば用いられ、有用性が証明されています。一方、画像上の転移部位や再発部位の同定には従来からCTや骨シンチグラフィが用いられているものの、これらの検査法ではPSA値比べて転移部位や再発部位を発見しづらいことがあります。そこで、オーストラリアで前立腺特異的膜抗原蛋白質（PSMA）を認識する分子にガリウム（^{68}Ga）で標識したPET画像診断薬（^{68}Ga-PSMA-11）が開発されました。これを用いたPET検査が米国、オーストラリアなどで既に実施されており、2-5mm程度の小さなリンパ節転移や骨転移の部位などの早期発見に役立つことが証明されました。今回、^{68}Ga-PSMA-11をテリックス社から供与していただき、前立腺癌において^{68}Ga-PSMA-11の有用性を臨床的に評価するために、国内で初めて第Ⅰ相医師主導治験を金沢大学核医学教室とともに施行し、^{68}Ga-PSMA-11の安全性と薬物動態・生体内分布を評価しました。その結果、日本の前立腺患者における安全性と、海外と同様の薬物動態・生体内分布が確認されました。

本臨床研究に関しまして、ご指導、ご支援いただきました核医学教室の絹谷清剛教授をはじめ、核医学教室の先生、泌尿器科学教室の先生、先端医療開発センターの臨床研究コーディネーターの方に心より感謝申し上げます。

令和4年度 中部地方発明表彰

加藤　仁志
（平成13年卒業）
金沢大学整形外科

この度、当科で開発し臨床応用している体幹運動器具RECORE（リコア）に関する発明『体幹筋力測定およびトレーニング装置（特許第5913144号）』に対し、中部地方発明表彰を受賞しましたので報告させていただきます。地方発明表彰は、実施されている優れた発明、考案または意匠を生み出した技術者、研究開発者を顕彰するもので、全国8地方に分けて募集・表彰しています（募集案内より。学内メールで告知されています）。優れた発明の完成者には、文部科学大臣表彰や国の栄典につながる機会とのことです。

腰痛は国民愁訴の第一位であり、腰痛患者に対する疼痛軽減・運動機能改善を目的とした運動療法は超高齢社会を迎えた日本において非常に重要なテーマです。当科では、慢性腰痛患者、特にロコモティブシンドロームを有する世代である中高齢者に適した体幹運動器具RECOREを開発し、この器具を用いた体幹安定性評価の意義や運動療法の効果を検証する様々な臨床研究を実施してきました。RECOREは、2020年より病院やクリニックで臨床応用され、大学研究機関においても使用されています。今回の受賞者において、責任研究者がアカデミア所属であったのは本件だけであり（他の受賞者施設として、三菱電機やリクシル、EIZOなど）、金沢大学のプレゼンスを全国に発揮できたものと考えております。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました土屋弘行教授をはじめ教室の先生方、リハビリ部のスタッフの皆さまに深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

第16回金沢市医師会 金沢医学館記念医学賞受賞

野崎　一朗
（平成13年卒業）
金沢大学附属病院脳神経内科

この度、「アルツハイマー病のリスク遺伝子・CD33のマクロファージ/ミクログリアにおける機能的役割の解明」の研究に対して、第16回金沢市医師会 金沢医学館記念医学賞を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

私の研究テーマは神経変性疾患の発症・進展における免疫細胞の役割の解明です。神経変性疾患であるアルツハイマー病の発症には、ミクログリアを中心とした神経炎症が関与することが報告されています。また、高齢発症アルツハイマー病のリスク遺伝子に関して、ゲノムワイド関連解析により判明したものの1つにCD33があります。CD33はシアル酸受容体の1つで、マクロファージ/ミクログリアに発現し、神経ネットワークの再構築や貪食による細胞外異物の除去に関与していると言われています。しかし、CD33の機能はまだ不明な点も多く、本研究はCD33の発現量の変化によ

るマクロファージ/ミクログリアの機能変化を明らかにし、CD33のアルツハイマー病発症への関与を解明することを目的として行いました。その結果、ヒトのマクロファージ/ミクログリアにおいて、CD33の欠損は免疫細胞を活性化し、炎症性サイトカインや活性酸素種を産生する一方で、アルツハイマー病において有害なアミロイドβの除去という有益な作用も引き起こすことが分かりました。この研究によりCD33がアルツハイマー病の治療的ターゲット分子として将来的に期待できると考えられました。

研究結果をご評価いただき、名誉ある賞を受賞させていただけたことを大変うれしく思います。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第16回金沢市医師会 金沢医学館記念医学賞受賞

五十嵐健太郎
（平成17年卒業）
金沢大学整形外科

この度「骨軟部肉腫に対する患者由来腫瘍同所移植モデルを用いた新規治療及び個別化医療の開発」の研究に対し第16回金沢市医師会金沢医学館記念医学賞を賜りましたので謹んでご報告申し上げます。

本研究は2015年より米国カリフォルニア大学サンディエゴ校ロバートホフマン先生のもとに留学させていただいていた際の内容となります。新規薬剤導入にもかかわらず未だ治療が手探り状態である骨軟部肉腫において、我々が開発した「より臨床を反映した動物モデル」である患者由来組織同所性異種移植（Patient derived orthotopic xenograft：PDOX）モデルマウスを用い、新規治療開発及び個別化医療の開発を行いました。このPDOXモデルは腫瘍を患者の体内発生部位と同じ臓器に移植するため、皮下移植モデルと比べ腫瘍周囲の微小環境の再現性が高く、移植した腫瘍組織は実際の患者の腫瘍と同様の浸潤、転移形式をとるため骨軟部肉腫の臨床をより反映しています。このPDOXを用い骨軟部肉腫に対する新規治療開発として①腫瘍特異性の高い細菌である*Salmonella typhimurium* A1-R、②腫瘍の代謝をターゲットとした酵素であるrMETase、③金沢大学で開発された新規プラチナ製剤1Pt、3Ptを用い研究を行い、それぞれ骨軟部肉腫に対する新規薬剤として有用性を示唆する結果を得ました。またユーイング肉腫患者から作成したPDOXモデルで見出した既存薬を再発に際して使用し、完解を得ることができたことで骨軟部腫瘍領域における個別化医療への可能性が示唆されたと考えます。

本研究に対し、ご指導いただきましたロバートホフマン先生、整形外科教授の土屋弘行先生、山本憲男先生はじめ整形外科学教室と同門の先生方に深く感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第54回小児感染症学会総会・学術集会 YIA（Young Investigator Award）受賞

松田　裕介
（平成22年卒業）
金沢大学小児科

この度、令和4年11月5日から6日に開催されました第54回小児感染症学会総会・学術集会にて、「本邦におけるMIS-Cと川崎病のサイトカインプロファイル比較」について発表し、YIAを受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

小児多系統炎症性症候群（MIS-C）は、COVID-19罹患後に多臓器にわたる炎症を引き起こす新しく認識された疾患です。川崎病に類似した症状を呈し、心不全やショックに至る重篤な疾患としてCOVID-19流行下の海外から報告されました。国内では今のところ数十例の報告にとどまるまれな疾患であり、国内症例の臨床像や免疫学的特徴は明らかになっていません。今回、全国から当科に解析依頼のあった12例をまとめて、本邦で初めてその臨床像とサイトカインプロファイルについて報告いたしました。また、研究結果からneopterinやIL-17、Granzyme Bをはじめとするサイトカインプロファイルの比較が、川崎

受　　賞

病との鑑別に有用であることが明らかとなり、そういった研究成果がご評価いただけたものと考えております。

今回の受賞にあたり、金沢大学医薬保健研究域医学系幹細胞免疫制御学分野の渡会浩志教授、香城論先生、由比光子さん、和田泰三教授をはじめとする小児科学教室の先生方にご指導いただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。また、全国の先生方から貴重な症例をご紹介いただけたことは、これまでの同門の先生方が築いた金沢大学への信頼の賜物と存じます。十全同窓会の先生におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。

第3回
十全医学奨励賞受賞

辻　　紀章
（平成26年卒業）
富山県立中央病院血液内科

この度、「自己免疫疾患としての再生不良性貧血における新たな免疫逃避機構の解明」の研究に対し、第3回十全医学奨励賞を受賞いたしました。私の研究内容について、簡単に紹介させていただきたいと思います。

再生不良性貧血は、造血幹前駆細胞が自己反応性T細胞によって攻撃されて枯渇する結果、汎血球減少を来す自己免疫疾患ですが、自己抗原の正体は未だわかっていません。HLA-DR15陽性例は、免疫抑制療法の反応性が高いことはわかっていましたが、その詳細は長らく謎に包まれていました。近年、急性白血病などの癌領域において、癌細胞がエピジェネティックにHLAクラスⅡの発現を低下させ、腫瘍免疫を回避しているという報告が相次いでいます。私たちは、再生不良性貧血患者の造血幹前駆細胞をフローサイトメトリー法やRNAシーケンスによる遺伝子発現解析などの方法で調べることで、HLA-DR15陽性例の造血幹前駆細胞において、エピジェネティックにHLAクラスⅡが欠失し、自己反応性T細胞から免疫逃避していることを解明しました。今後は、HLA-DR15が提示する自己抗原の同定を目指しています。なお、本研究は、Leukemia誌に掲載されました。

最後に、基礎研究ならびに臨床の面でも多くのご指導を賜りました、金沢大学血液内科名誉教授の中尾眞二先生、金沢大学血液内科教授の宮本敏浩先生、金沢大学血液内科講師の細川晃平先生、そして金沢大学血液内科同門の先生方やスタッフの皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第52回
日本皮膚免疫アレルギー学会
学術大会優秀演題賞受賞

伏田奈津美
（平成28年卒業）
金沢大学附属病院皮膚科

この度、令和4年12月に開催されました、第52回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会において優秀演題賞を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

私の研究テーマは、「抗hUBF抗体陽性患者の臨床的特徴についての検討」です。抗hUBF抗体は、抗核抗体のなかでも蛍光抗体間接法の染色パターンが核小体型を示す自己抗体の一つであり、全身性強皮症をはじめとする様々な膠原病で陽性となります。一方で、肝細胞癌などの膠原病以外でも検出され、その臨床像は十分に明らかになっていません。今回われわれは、当科で診断した抗hUBF抗体陽性患者19例の臨床的特徴を検討しました。検討の結果、本抗体陽性患者には全身性強皮症の割合が高く、皮膚硬化は比較的軽度で間質性肺疾患や関節症状を比較的高頻度に認めることが分かりました。また、未分化膠原病の割合も高く、その多くが将来全身性強皮症に移行する可能性が示唆されました。抗hUBF抗体を検出するELISA試験試薬は開発されておらず、同定には免疫沈降法が必要であるため、見逃されているケースも多いと考えます。今回の研究が、多くの先生方に抗hUBF抗体の存在を知っていただくきっかけになれば幸甚です。また、当科では免疫沈降法を行っており、他施設からのご依頼も承っております。全身性強皮症や皮膚筋炎/多発性筋炎で特異抗体不明の患者さんがおりましたら、ぜひ当科にご依頼いただけますとありがたく存じます。

最後に、今回の受賞にあたり、ご指導をいただきました松下貴史教授をはじめ教室の先生方に感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

第81回日本癌学会 JCA若手研究者ポスター賞受賞

溝上　晴恵
（平成28年卒業）
金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

この度、令和4年9月29日から10月1日にパシフィコ横浜で開催されました第38回日本癌学会で、「EBVゲノム結合領域での上咽頭癌のエピゲノム異常」という演題でJCA若手研究者ポスター賞を受賞いたしましたので、ご報告申し上げます。

上咽頭がんはEpstein-Barrウイルス（EBV）が原因として知られていますが、EBVゲノムが引き起こすエピゲノム発癌機構についてはあまり研究が進んでいませんでした。そこで、EBVゲノムが作用する宿主ゲノム領域（EBV interacting region, EBVIR）でのエピゲノム異常を次世代シークエンサーを用いて解析しました。同定された50ヶ所のEBVIRのうち、9割程度は遺伝子発現が抑制されたヘテロクロマチン領域でした。この領域は背景領域と比較し、正常細胞の活性化ヒストン修飾が優位に少ない領域でした。しかし、正常細胞とがん細胞を比較すると、がん細胞で活性化ヒストン修飾が優位に多いことが判明ししました。さらに、EBVIR周囲に存在する遺伝子には、EBVIR内の異常な活性化エンハンサーとゲノムループを構成しているものがあり、それが上咽頭癌の細胞増殖に寄与していることが判明しました。今後は臨床検体でもEBVIRを同定し、エピゲノムの解析も進めていきたいと考えております。

本研究は、千葉大学分子腫瘍学教室にて金田篤志教授、岡部篤史先生のご指導のもと進めることができました。また、千葉大学への国内留学を勧めてくださった金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の吉崎智一教授、近藤悟先生を始めとした教室員の皆さまに、心より感謝申し上げます。この賞を励みに、今後も頭頸部がんの基礎研究に尽力していく所存でございます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第19回 金沢大学十全医学賞受賞

酒井　克也
（令和元年大学院修了）
がん進展制御研究所

この度「人工細胞成長因子・阻害分子の創成と応用の研究」に対し、第19回金沢大学十全医学賞を賜りました。以下、研究内容を概説いたします。

サイトカインや細胞成長因子は微量でも優れた生理活性を発揮する蛋白質で医薬品として利用されていますが、一般に血中半減期が短く、脳内に到達できないため、慢性疾患や中枢神経疾患の治療に利用することは困難です。例えば、肝細胞成長因子HGFはMet受容体を介して上皮細胞や神経細胞の再生、炎症抑制、線維化改善を促しますが、肝硬変など慢性疾患や中枢神経疾患の治療に利用することは困難です。私たちは、特殊環状ペプチドのin vitroセレクション法によって取得したMet受容体結合ペプチドを二量体化したものが、Met受容体を活性化し、細胞増殖、遊走、管腔形成などの生物活性を誘導することを示しました。さらに、Met受容体結合ペプチド配列を、血中に長期に維持される抗体Fc内や、脳内移行性をもつ抗体内に内挿することによって、長期作動性Met受容体アゴニストや脳内移行性Met受容体アゴニストを作製できることを示しました。本方法は様々なサイトカイン・細胞成長因子受容体に応用することが可能であり、長期作動性、脳内移行性の人工サイトカイン・細胞成長因子は、慢性疾患や中枢神経疾患に対する新しい治療法の開発につながるものと期待されます。

本研究に対し、ご指導、ご支援いただいた金沢大学がん進展制御研究所腫瘍動態制御分野松本邦夫教授、大阪大学蛋白質研究所高木淳一教授、東京大学大学院化学菅裕明教授、共同研究者の皆さま、そして腫瘍動態制御研究分野の皆さまに心より感謝申し上げます。

病 院 紹 介

国家公務員共済組合連合会
北陸病院

当院の歩み

北陸病院は昭和31年に結核対策病院として非現業共済組合連合会北陸病院として開設され、昭和39年に一般病院に転換しました。平成9年に国家公務員共済組合連合会北陸病院に改称しました。平成14年には病棟、診療棟、健康管理センターの新築を行いました。

当院の現状

北陸病院は病床数124床（急性期病床40床　地域包括ケア病床84床）の小規模病院であります。現在の標榜診療科は19科、大別すると内科、外科、整形外科、泌尿器科、放射線科、麻酔科で構成されています。内科は循環器内科、消化器内科、糖尿病代謝内科、腎臓内科の常勤医とリウマチ科、脳神経内科、呼吸器内科の嘱託医で構成され、ほぼ全ての内科疾患に対応してます。外科は、呼吸器外科、消化器外科、乳腺外科の常勤医と心臓血管外科の嘱託医で構成され、幅広い外科疾患に対応しており、緩和医療や化学療法にも取り組んでいます。整形外科はスポーツ整形を得意とし、日本サッカー協会（JFA）日本ハンドボール協会（JHA）に医科学的に協力しグローバルに活躍しています。スポーツリハビリも積極的に取り組み、各リハビリ担当者が専門性をもって行っています。また、基礎疾患を多く内包する高齢者の整形外科疾患には、内科医も協力し、大腿骨近位骨折多職種連携パスの活用など多職種連携にて対応可能となっています。内視鏡検査は、健康管理センターによる検診も含め令和3年度（R3：4月－R4：3月）において、上部消化管内視鏡6833件、下部消化管内視鏡1566件（この内、TCS：868件　EMR：379件）行っております。TCS女性day（女性限定で女性医師によるTCS）は女性の方には好評です。糖尿病は若手医師3名が中心となり、糖尿病療養指導士9名とともに、治療から指導まで最先端の診療を行っています。乳腺科は乳腺外科医、乳腺を得意とする放射線科医、検査技師含めてスタッフ全員が女性であり、女性が受診しやすい環境整えるとともに質の高い診療を行っています。金沢大学の未来型健康増進医学とタイアップし生活習慣病のオンライン診療も行っており、医科学的指導による生活習慣病の改善に効果をあげてます。地域医療構想では病院規模に応じた機能役割分担と連携を求められており、当院としては、「サブアキュートやポストアキュートに対応可能な一定の急性期機能を保持した在宅医療も担う後方支援病院」としての役割を担う方針としています。地域包括ケア病棟にて総合病院や近隣の診療所の後方支援病院としての役割を果たすとともに、患者さんの在宅療養を医療面から支える目的で令和3年に在宅医療科を立ち上げました。内科、外科の病棟担当医が分担して行うスタイルとして、持ち回り待機制の導入で24時間365日対応の在宅医療（訪問診療、往診、訪問看護、訪問リハビリ）を行っています。

今後の課題

当院としては、金沢大学病院などの総合病院や近隣の病院、施設、診療所との連携が大切と考えております。互いの異なる立ち位置を認め合いながら、地域住民の方々の健康を守るために協調していきたいと思ってます。当院の運営は金沢大学からのご支援を受けて成り立っています。今後とも十全同窓会の皆さまのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（病院長　増永　高晴：記）

概 要

国家公務員共済組合連合会　北陸病院

所在地	石川県金沢市泉が丘2丁目13番43号
病院長	増永　高晴
病床数	124床（一般急性期病床40床　地域包括ケア病床84床）
診療科数	19

沿 革

昭和31年11月	結核対策病院として非現業共済組合連合会北陸病院を開設
昭和39年10月	一般病棟も併設され一般病院に転換
昭和57年　6月	2次救急病院に指定
平成　6年　4月	健康管理センターを開設
平成　8年　4月	結核病棟を廃止
平成　9年　6月	国家公務員共済組合連合会北陸病院に改称
平成12年　4月	訪問看護室（後に訪問看護ステーションに改称）を開設
平成14年　4月	現地にて病棟、診療棟、健康管理センターを新築
平成25年　5月	強化型在宅療養支援病院に指定
令和　3年　6月	在宅医療科を新設

石川県済生会金沢病院

当院の歩み

当院は昭和11年に金沢市本町に恩賜財団済生会金沢診療所として開設され、以来、済生会創立の精神である『施薬救療』のもと、地域に密着した医療の提供に努めてきました。また、平成6年に現在の金沢市赤土町に新築移転し、病床数260床の公的病院および社会福祉法人として、今日までその役割を果たしてきました。さらに、平成7年に緩和ケア病棟（28床）、平成14年に回復期リハビリテーション病棟（45床）、平成29年に地域包括ケア病棟（42床）をそれぞれ開設し、時代や地域のニーズに合わせて対応してきました。

また、済生会の使命である『無料低額診療事業』や『生活困窮者支援事業』にも精力的に取り組んでおり、経済的な理由によって必要な医療を受ける機会を制限されることのないよう、社会的弱者に対して積極的に手を差し伸べるのが当院の大きな役割の一つとなっています。

当院の現状

当院は常勤医が30名（うち女性医師9名）と決して大きな病院ではありませんが、近隣の石川県立中央病院と連携させていただきながら、一般急性期（ポストアキュート、サブアキュート）から回復期医療、そして慢性期の病院や施設、あるいは在宅につなげる医療を提供しています。

当院の強みは、第1に、消化器内科（4名）・外科（4名）による内視鏡手術と緩和ケア、第2に、整形外科（5名）・リハビリ科（3名）による脊椎・関節手術とリハビリ（理学療法士・作業療法士など約50名）、第3に、内科（8名）による糖尿病・心臓病・腎臓病・リウマチ診療と透析医療（透析患者約100名）であり、その他泌尿器科（1名）、眼科（1名）、麻酔科（2名）、放射線科（1名）、健診センター（1名）と力を合わせて病院運営を支えてくれています。

また、この3年に及ぶコロナ禍のなかで、当院は重点医療機関として中等症Ⅱまでのコロナ患者を受け入れるとともに、石川県から委託された『いしかわPCR検体採取センター』の運営（令和2年6月8日～令和4年12月22日、PCR検査総数18,092件）などを全職員が一丸となって取り組んでくれました。

今後の課題

当院では医師の不足（＋高齢化）、特に当直ができる医師（＋夜勤ができる看護師）の不足が顕著となり、さらに働き方改革の影響もあり、現状の当直体制を維持できるかが喫緊の課題となっています。当院と同規模の多くの病院が直面し、疲弊している医師不足の問題は当分解決される見込みがなく、個々の病院や医師の努力にも限界があるなか、研修医・専攻医の獲得はもちろん、病院の機能分化や連携、他職種とのタスクシフト・シェア、医療ＤＸの推進などが今後ますます重要になってくると思われます。

当院を中心とした半径10km圏内には、100床以上の急性期病院（高度急性期を含む）が大学・公立・公的・民間を合わせて13病院もあります。このような特殊な環境にある石川中央医療圏の地域医療構想のなかで、社会福祉法人としての使命、そして地域から求められる病院としての役割を果たすべく、当院の強みを生かしながら生き残る道を進んでいきたいと思っています。

十全同窓会の皆さまにおかれましては、今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（病院長　荒木　勉：記）

概要

石川県済生会金沢病院

所在地　石川県金沢市赤土町ニ13番地6
病院長　荒木　勉
病床数　260床（一般病床）
診療科数　17

沿革

昭和11年 4月	恩賜財団済生会金沢診療所として金沢市本町に開設
昭和13年12月	石川済生病院として病院に組織変更
昭和40年10月	済生会石川総合病院に改称
平成 3年10月	石川県済生会金沢病院に改称
平成 6年10月	金沢市赤土町に新築移転
平成 7年 1月	緩和ケア病棟開設
平成14年11月	回復期リハビリテーション病棟開設
平成23年 4月	石川県地域がん診療連携推進病院に指定
平成29年 7月	地域包括ケア病棟開設

教室だより

脳神経医学

研究

私たちは、脳神経系を用いた基礎研究と臨床との融合的研究を心がけています。過去には脳神経系の再生医学的研究を行い、全能性幹細胞であるES細胞からドーパミン作動性神経細胞や網膜色素上皮細胞などの有用細胞を試験管内で作成することに世界で初めて成功しました。この技術は山中伸弥先生が開発されたiPS細胞にも応用され、現在、理化学研究所や京都大学iPS細胞研究所を中心に世界に先駆けて日本で進められている、加齢黄斑変性症やパーキンソン病の患者さんへのiPS細胞の再生医療の発展の端緒となりました。私たちはその後、新しい研究プロジェクトを開始し下記の方向へ研究を発展させています。

1）高等哺乳動物を用いた脳神経系の形成、進化および疾患の研究

現在、医学研究に用いられているマウスの脳はヒトの脳よりも小さく原始的です。従って私たちは、ヒトの脳の理解にはマウスを用いた研究では不十分と考えました。そこで、ヒトに近い発達した脳神経系の研究が今後重要になると考え、高等哺乳動物フェレットを用いた研究を開始しました。フェレットを用いた遺伝子同定技術、フェレットの脳神経系への遺伝子導入法やノックアウト技術を世界に先駆けて確立してきました。この技術を用いて、高次脳機能の獲得に重要と考えられている脳回(大脳皮質表面のシワ)の形成メカニズムや形成異常疾患の病態、さらに進化的な脳回の獲得メカニズムを明らかにしてきました。また高等哺乳動物に特徴的な大脳神経回路の複雑化プロセスも明らかにしてきました。これらの研究は、脳機能発達の理解の基盤になると考えられます。現在はフェレットを用いて脳神経疾患の病態解明にも新たに取り組んでいます。

2）脳神経系に影響を与える遺伝要因と環境要因の解明

脳神経系には遺伝要因と環境要因の両者が影響を及ぼします。赤ちゃんが母親から生まれ出ること、即ち「出生」は母体内から外界に出ることから、生涯において最も劇的な環境変化と言うことができますが、脳神経系の発達における出生の重要性はほとんど分かっていませんでした。私たちは出生が脳神経系の発達を促すスイッチであり、その下流に神経伝達物質セロトニンが位置するという新たな制御システムを発見しました。さらに早産によって脳神経系の発達が早まることも見つけました。今後、出生の重要性が次々と明らかになることが期待されます。

教育

医学類では1年生の「アカデミックスキル」を担当し、1年生「医薬保健学基礎」、2年生「神経生理学」を分担しています。また「基本的基礎配属」やMedical Research Training（MRT）プログラムでは医学類生を受け入れています。医薬科学類で「脳神経医学」を、融合学域先導学類では「生命科学的視点から見る医療」と「先端医学」を担当し、保健学類で「生体の機能」を分担しています。大学院講義としては「アドバンストメディカルサイエンスセミナー」、「メディカルサイエンスセミナー」と「人体機能学」を分担しています。

また教室の大学院生には、研究の戦略、実験技術や論文作成法などの研究の基盤ノウハウを伝え、1人1人が成長しながら研究プロジェクトを論文にできるように指導することを心がけています。その結果、教室からはこれまでに浜松医科大学とドイツFriedrich-Alexander大学に2名の教授を輩出しています。今後もさらに充実した研究教育内容を工夫し、教室員の成長を支援していきたいと考えています。

おわりに

教室員一同、金沢大学の発展のために研究・教育に励んでまいりますので、今後とも十全同窓会の諸先生方にはご指導とご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。末筆となりましたが、今回の執筆の機会をいただきました絹谷清剛教授に感謝申し上げます。

（河﨑　洋志：記）

スタッフ

教　授　　河﨑　洋志
助　教　　齋藤　健吾
大学院生6名
技術補佐員1名
医学類MRT学生9名

研究分野の沿革

神経情報研究施設の開設10年が経過した昭和51年に神経物性研究部門が発足し、中村俊雄先生が初代教授として着任されました。続いてがん研究所薬理部の東田陽博先生が第二代教授に就任されました。平成10年には重点化大学院の一部門として細胞遺伝子学教室に変更され、平成13年には医学部の大学院部局化に伴い脳細胞遺伝子学研究分野に改編されました。平成25年に東京大学大学院医学系研究科より河﨑洋志が第三代教授に着任しました。平成28年に脳神経医学研究分野と改称され、現在に至っています。

消化管外科学
乳腺外科学

診療

金沢大学附属病院の外科診療科において、当教室は消化管外科と乳腺外科を担当しています。

消化管外科では、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、直腸、肛門までの管腔臓器を対象としています。消化管は悪性腫瘍の発生頻度が高い領域です。食道がん、胃がん、大腸・直腸がんに対する外科的切除では、低侵襲手術（胸腔鏡、腹腔鏡）を積極的に適応し、術後合併症の低下や早期回復に努めています。また、ロボット支援下手術を導入し、高難度手術をより正確に安全に行なうことを目指しています。今年、国産の手術支援ロボットhinotoriを北信越では初導入し、ロボット手術を益々発展させたいと思っています。また、薬物療法や放射線治療を併用する集学的治療によって、高度進行・切除不能がんに対する治療成績の向上を目指しています。その他、炎症性腸疾患や、消化管粘膜下腫瘍、高度肥満に対する減量手術など、多岐にわたる疾患に対応しています。

乳腺外科では乳がんの診断、手術、薬物療法、転移再発治療などを行っています。抗がん剤治療をより的確に選択するための多遺伝子アッセイの導入や脱毛を抑制するための頭皮冷却の併用、抗がん剤治療による卵巣機能障害への対策として妊孕性温存の取り組みを実践し、個別化医療を追求しています。

教育

医学類教育では、腫瘍学（腹部腫瘍、乳腺腫瘍）、栄養・消化器学系統講義（胃十二指腸の外科、消化管機能異常・腹膜炎）の講義を行っています。コアローテーションでは手術見学・参加に加え、将来の臨床研修に欠かせない外科基本手技の習得を指導しています。患者症例検討会を通して、座学で得た知識をより確実なものとし、実臨床との懸け橋となるような総合実習教育を行っています。大学病院における高度先進医療の実際を体験・習得することのみならず、北陸3県の関連病院の協力のもと学外実習を実施し、包括的な外科実習となるようにしています。さらに、外科の他の医局と協力し、縫合・結紮・消化管吻合や腹腔鏡手術などの体験会（ウェットラボ・研修医ワークショップ）を定期的に開催し、外科の魅力を広く伝えられるような取り組みを行っています。

研究

研究内容としては、「消化器癌の微小環境下における分子病理学的メカニズム」「逆流性食道炎由来食道発癌の化学予防」「胃癌腹膜播種の癌関連線維芽細胞の機能解析と新規標的治療」「胃癌腹膜播種のがん免疫病態の解明」「大腸癌肝転移に対するabscopal効果」など多岐にわたります。いずれも実臨床を通じて得られた問題点を改善するために開始したテーマであり、“Bed to Bench, Bench to Bed”を心がけて大学院生と教室スタッフが一体となって取り組んでいます。また、「痛み刺激によるhedgehogシグナルの活性化と癌微小環境の関連」など手術侵襲と消化器がんの進展をテーマとした研究や、「内視鏡外科手術における手ブレの定量化と誘発モデルの検証」といった外科手術における人間工学に関する基礎的検討を進め、医工連携による低侵襲治療デバイス開発にも取り組むなど、自由な発想を育む環境を目指しています。

おわりに

教室の信条として、「多様性を尊重し助け合う」、「伝統に敬意を表し革新を目指す」、「地域に根差し世界に発信する」の3条を掲げています。外科離れが進むといわれる昨今ですが、一人一人が“憧れられるAcademic surgeon”となれるよう努力し、外科再興の狼煙を挙げるべく、一致団結して精進していきたいと思っています。十全同窓会の皆さまには、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

（稲木　紀幸：記）

スタッフ

教　授　　稲木　紀幸
准教授　　木下　　淳
特任准教授（医療安全部）森山　秀樹
助　教　　山本　大輔、辻　　敏克、
　　寺川　裕史、齋藤　裕人、
　　島田　麻里
特任助教　平田　美紀
医員2名、医学博士課程19名（うち中国人留学生1名）、秘書3名、技術補佐員1名

研究分野の沿革

1922年金沢医学専門学校に泉伍朗が教授として赴任し、1923年に金沢医科大学として講座制となりました。1928年より熊埜御堂進が受け継ぎ、1949年に金沢大学医学部外科学第二講座となりました。1959年より本庄一夫、1965年より水上哲次、1974年より宮崎逸夫、1997年より三輪晃一が受け継ぎ、2001年にがん局所制御学講座に変更、2006年より太田哲生が受け継ぎ、2017年に胃腸外科学および肝胆膵・移植外科学の2講座を併設しました。2021年より胃腸外科学講座を稲木紀幸が受け継ぎ、同年講座名を消化管外科学/乳腺外科学講座に改称し現在に至ります。

金沢から世界へ発信

Society 5.0を実現し未来を切り拓くイノベーション創出とそれを支える基盤の強化

金沢大学大学院医薬保健総合研究科
未来型健康増進学講座
米田　隆
（平成2年卒業）

研究背景と歴史

我々の研究グループの起源は竹田亮祐名誉教授（旧第二内科）が始められた副腎の研究で、1953年のアルドステロン発見から始まり、現在も、私自身が厚労省副腎研究班員や日本内分泌学会のアルドステロン診療ガイドライン作成委員として関わり、70年にわたり継続しています。その研究内容はゲノム、エピゲノム、オミックス解析の基礎研究から大規模臨床データを用いた臨床研究に及びます。その中で、国内外の臨床上のアンメットニーズに応えるべく、医と理工の融合研究で、ナノテクノロジーを用いた迅速コルチゾール測定キットを開発、国内外の特許取得、海外（欧州、豪州）での薬事承認ならびに企業との産学連携により社会実装を実現しました。また、内分泌代謝疾患診療の特性から、IoT技術を用いた遠隔診療にいち早く注目し、メディカルイノベーションをテーマとして、2008年からIoT利活用の研究に取り組んでおります。

医療を超えた先進国の抱える課題

「超高齢化社会」を迎えたわが国は，医療福祉、経済を含めた重大な社会問題に直面しています。解決のためには、第4次産業革命と呼ばれる今、IoT・AI（人工知能）・VR（仮想空間）技術等を活用した未来型医療・健康増進サービスの構築や先制医療による健康寿命延伸が必要です。これは、今まさに、期待される産業分野でもあり、産学官金連携による健康・医療関連新産業の創出、人材育成、さらには国際展開することが、わが国の再生にも重要です。

本分野は、そのような社会状況の下、異分野融合、多職種協働の下、以下のものに取り組んでいます。①ゲノム・エピゲノム情報、オミックス解析を用いた先制医療の確立　②IoT．AI・VRを用いた遠隔医療・ヘルスケアシステム構築　③AI、データサイエンスを用いた疾患予測システム（循環器疾患、内分泌・代謝疾患などの生活習慣病、認知症やフレイルなど）　④体外診断薬・医療機器開発ならびに薬事承認の研究　⑤医療・ヘルスケア分野のアントレプレナー研究　⑥医療行政研究　また、研究手法、研究フェーズとして　（1）ニーズの把握、Brain Storming等を用いたデザインシンキング　（2）Marketing　（3）知財確保　（4）基礎研究　（5）臨床研究（6）薬事承認（国内外）を目的とした基礎臨床研究（POC取得）　（7）アントレプレナー（起業）があります。産官学金連携は勿論、医薬保健領域内での医学、薬学、保健学間連携、さらには人文社会領域、理工領域との連携をしております。

デジタル医療

【ココカラ】Research54「生活習慣の改善を促すデジタル医療」融合研究域融合科学系 米田隆教授/金沢大学研究紹介動画 - YouTube

「生活習慣の改善を促すデジタル医療」

デジタル医療とは、スマートフォンや時計型ウェアラブル等の通信技術とAI等を活用した未来型医療です。生活習慣病に対しては、オンライン指導を行い、行動変容を促すというものです。研究の一例ですが、AIが管理栄養士となり食事、さらには、血圧・体重・運動に関しての生活情報も加え、生活習慣改善の指導を行います。AMED事業、厚労省科研事業でこのデジタル医療研究を実施、有用性や安全性を証明しました。自民党本部の政調、データヘルス推進特命委員会、国民・患者視点のデータヘルスWGで政策提言なども行っています。

また、さまざまなビックデータを用い、AIで疾患や合併症予測する研究も行っています。AIを用いて診療所の簡単な臨床データだけで原発性アルドステロン症の診断から病型まで鑑別するAIなども開発しています。

医学生2名とデジタル医療機器（SaMD：（Software as a Medical Device））を共同開発中ですが、2023年3月、彼らとともに米国シリコンバレーにてVC（ベンチャーキャピタル）の方々の前でピッチとよばれるプレゼンをし、投資の可能性なども探ってきています。

最後に

健康とは、単に疾病がない状態ではなく、さまざまな面で社会的（経済的も含む）にも、日々幸せと感じられるwell-beingの状態です。そのwell-being最大化につながるよう医学研究成果とデジタル技術等の先端科学技術を「融合」させ、世界に発信できるよう精進していきたいと思います。これからも多様な分野との共同研究を進めていきたいと思います。その際はお願いすることもあるかと思いますが、どうかご支援のほどよろしくお願いいたします。

同窓生の消息

第51回医療功労賞を受賞して

医療法人社団あいずみクリニック理事長
四十住　伸一
（昭和50年卒業）

このたび図らずも「第51回医療功労賞」の中央表彰を受けるという栄誉な機会をいただきました。

私は、金沢大学を卒業後、石川県をはじめ、富山県、福井県内の病院で勤務し、1991年郷里の珠洲市へと戻り、10年間珠洲市総合病院で脳神経外科医として勤務し、2001年クリニックを開業しました。専門性をいかした診察はもちろん、田舎の開業医ならではの専門外の病気や怪我等に取り組んで参りました。MRIを導入したこともあり、珠洲市をはじめ、能登町や輪島市、穴水町と奥能登各地から足を運んでいただきました。

介護保険が普及するなか、2007年にデイケア施設を併設し、珠洲市や能登町から利用者を迎えました。開業時からの念願であった、比較的若い脳卒中等の患者の受け入れを行うことができました。

開業から22年、ここまで続けてこられたのは、スタッフをはじめ、地域の皆さまのおかげとただただ感謝しております。積雪時の駐車場の人力除雪作業、次々と届く数々の書類、手書きからコンピューター処理となっていく、いろいろな作業を、72歳と高齢になった今、スタッフに支えられながら何とかこなしている状況です。

開業時と比較して、過疎化高齢化の影響は大きく、高齢化率50％を越えているこの珠洲市で、この先いつまで元気に仕事を続けられるのか分かりませんが、この受賞をひとつの励みとして、できる限り頑張っていけたらと思っております。

ありがとうございます。

医師国家試験結果

コロナ禍の中で実施された第117回医師国家試験の合格者状況が、2023年3月16日、厚生労働省から発表されました。金沢大学医学類の合格状況も含めて報告いたします。

全国の受験者数は10,293名で、そのうち合格者は9,432名、合格率は91.6％（新卒者94.9％、既卒者55.2％）でした。金沢大学医学類では総数として135名が受験し、119名が合格で合格率88.1％（新卒者90.2％、既卒者69.2％）と、全国平均の91.6％を下回りました。この5年間における新卒者の合格率の推移は、96.5％（2016年度）、96.7％（2017年度）、96.2％（2018年度）、94.2％（2019年）、95.5％（2020年度）、91.0％（2021年度）と、2021年度から低下し、本年度も90.2％も昨年度と同様な合格率で、ここ2年間は苦戦している状況となっております。

新卒者の合格率が低迷している理由として、2021年度卒業生からは国際認証による医学教育改革のため、カリキュラムが診療参加型臨床実習72週へ移行したことが影響している可能性はあります。実習期間の拡大とともにカリキュラム全体が窮屈になっており、時間的余裕がなくなり、医師国家試験の勉強を行う時間が十分に取れなかったかもしれません。また、今回の医学類の新卒者のうち14名（11.5％）が1回以上の留年経験者で、留年経験のある新卒者の合格率が極めて低い（5名合格で9名不合格：合格率35.7％）ことが今後の改善すべき課題と考えています。留年生の学修支援体制構築とメンタルケアが喫緊の課題であり、至急、体制を整えたいと思います。教育委員会と医学教育研究センターでこの原因をさらに究明し、早期から十分な対策を講じて2023年度の新卒者には是非100％を達成してもらいたいと願います。

金沢大学医学類医王保護者会、学生支援委員会、教育委員会、医学教育研究センター、チューター教員、学生課学務係の教職員は引き続き一丸となって、学生へのきめ細かいサポートを行っていきます。医学類では、より良い学習環境の整備を行いながら、次代を担う医師・医学研究者の育成に邁進したいと思います。

（杉山　和久：記）

第117回医師国家試験結果　※（　）内は第116回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
令和5年3月卒業者	122名（111名）	110名（101名）	12名	90.2%（91.0%）	94.9%（95.0%）
令和4年3月以前の卒業者	13名（9名）	9名（6名）	4名	69.2%（66.7%）	55.2%（54.0%）
合　計	135名（120名）	119名（107名）	16名	88.1%（89.2%）	91.6%（91.7%）

支 部 だ よ り

山形支部

十全同窓会山形支部総会を令和4年10月29日に酒田市で開催しました。

今回は酒田市の池田先生が幹事でした。新型コロナの第７波がかなり収束し第８波が始まる前をねらい？ました。今年は池田先生のアイデアでフランス料理店での食事会となりました。酒田は江戸時代から最上川河口の港町として発展した土地柄か、新し好きの気風があるようで昔からフランス料理店がありましたが、今回は割と新しく開店したレストランNicoという店でした。米沢の石橋先生は、1週間前にこの店宛にボルドー赤ワインを1本送ってくださいました。カベルネソービニヨンの30年もので、1週間前に送らないとオリが沈まないとの事でした。さすがワイン通の石橋先生。出席者はいつもの4人（石原、森谷、池田、石橋）で再会を祝してシャンパンで乾杯しました。酒田周辺の海で獲れる魚貝を中心にした料理でアイデアの面白い、時に奇抜な美味しい料理でした。石橋先生の30年ものボルドーの赤ワインはさすがにまろやかで美味しくいただきました。時価で15万円にはちょっとビビリましたが。新型コロナの話になり、もう俺2回かかったという猛者がいました。1回目は山形でコロナが流行し始めた初期で、寒気がひどくて不安もあり楽でなかったけれども、２回目は割と楽だったそうです。石原先生は新型コロナが流行する直前に小児科医院を手仕舞いしたので、自分と妻だけ守ればいいから楽だよと言っていました。私は、前日予防注射した子が翌日新型コロナを発症したり、小児科を手伝ってくれた看護師が翌日コロナ発症したりとニアミスはありましたが感染せずに済んでいる状況で、いつ誰が罹ってもおかしくない状態が続いています。この原稿を書いている今は第８波も収まりゴールデンウイーク明けには新型コロナが５類感染症になるとのことですが、現場は普通の外来に戻すのは不安があり、連休明けの流行状況を見ながら判断してゆくことになりそうです。同窓会の先生方のご健康をお祈り致します。

（森谷　直樹：記）

香川支部

令和5年度金沢大学十全同窓会 香川支部会が4月29日（土）、キ星において開催されました。

前十全同窓会香川支部長 三好恵一先生より下記の号令のもと

「拝啓　本当に長い期間ご無沙汰しておりました。その間、皆さまにおかれましてもいろいろなことがございましたでしょう。私は後期高齢者になってしまいました。またコロナ禍で、人との交流さえもままならない状況でしたが、漸く県内発症人数が減少し、そのことを祝うがごとく、桜花爛漫な季節が戻ってまいりました。

ご存じのごとく、十全会香川支部は、完全休眠状態になっておりました。私も、新しい人に運営をバトンタッチしたい思いでしたが、それも儘ならず、看過しておりましたことをお詫び申し上げます。

しかし、幸運なことに、私より一世代以上若い方から、十全会香川支部会を再興しようではないかとの嬉しいお声が上がってまいりました。そこで十全同窓会香川支部総会を近日中に開催したいと思います。目的は、役員改選と今後の運営をどうするかの二点です。なお、今回は、開催の準備全般を、屋島総合病院副院長浅海浩二先生を中心にお願いすることといたしました。

ご多忙の折とは思いますが、万障お繰り合わせの上、ご参集お願いいたします。最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。敬具」

私がその命を受け、本同窓会を開催する運びとなりました。

参加者は卒業年度順に昭和45年卒業 三好恵一先生、昭和48年卒業 徳野眞之先生、平成3年卒業 市川智嗣先生、平成3年卒業 大林弘明先生、平成8年卒業 岡島正樹教授、平成8年卒業 田村昌也教授、平成8年卒業 羽藤泰三先生、平成8年卒業 浅海浩二（筆者 香川支部長）、平成10年卒業 小林正彦先生、平成12年卒 門田弘明先生、平成13年卒 徳毛誠樹先生の11名でした。特筆すべきは金沢大学十全同窓会から私の同級生で金沢大学医薬保健研究域医学系救急災害医学分野・救急科の岡島正樹教授を派遣いただきご講演の上、懇親会に参加いただいたことです。また、同じく同級生で昨年同じ四国の高知大学医学部呼吸器外科学の教授に就任した田村昌也教授も駆けつけてくださり、大いに盛り上がりました。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。ゆくゆくは高知大学の田村教授と協力し四国全体の同窓会を開催すること目指しております。金沢から遠く離れた四国での金沢大学出身者の繋がりを強めてまいりたいと思います。

（浅海　浩二：記）

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その8）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

写真：医学生と緩和ケアチームスタッフ（麻酔科蘇生科）
佐伯（専門看護師）、矢島、長谷川、北村、舘、筆者

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」という課題を与えています。令和4年度5年生の3名（長谷川玄君、彦田藍子さん、北村志歩さん）は自身の経験をもとに興味深いレポートを作成してくれました。（写真）

1）音楽死生学

迫りくる死の恐怖と戦い必死に命にしがみつく患者に、私たちは何ができるだろうか。患者を第一に考えることや寄り添う姿勢は、全ての医療者に求められる基本的な要素である。医師にしかできないことは数多くある。医療用麻薬等の薬剤を適切に投与して苦痛を和らげること、告知や病状説明の方法により精神的苦痛を緩和すること、スピリチュアルケアを意識すること、さらに病態と治療法を解明すること、最新の研究と臨床現場の患者を繋げることである。

一方で医師ができないこととして、私の母が実践している音楽死生学を紹介した。音楽死生学士は患者の呼吸に合わせて歌い、ハープを奏でて患者を穏やかに看取る。非言語的方法で五感に訴える手法によるスピリチュアルケアである。ただし、医師の協力がないと音楽死生学士は実践できない。医師は医療チームのリーダーと言われるが、医師以外の従事者の役割に意識を向けることが少ないと危惧する。私が医師になった時、積極的に最善を探求する幅広い視点をもって活動したいと考えている。

2）私が考える医療者の「死」との向き合い方

10年前に祖父を看取った時、初めて直面した「死」のあまりの悲しさと怖さ、自分にできることもせずに祖父や家族に悔しい死を迎えさせてしまった情けなさで、私の志は一度折れてしまった。医師の「治す」側面に憧れるばかりで、それは同時に「死」と向き合うことであると気づいていなかった私は、医師への道から逃げ出してしまった。

他大学を卒業した後、再受験して入学した金沢大学医学類1年生の夏に、スタンフォード大学に短期留学して緩和医療を学ぶ機会を得た。学習の一環で訪れたホスピスでは、職員が笑顔で働いており、その笑顔が「死」と向き合う最大のヒントを与えてくれた。それは、「医療者の役割は、死を目前にした患者やその家族が誰しも抱えている怖さから引っ張り上げることであり、引っ張り上げる側が一緒に悲しみにのまれている場合ではないのだ」ということだ。

患者も医療者も怖さに押しつぶされそうな時は、誰かに話すことが大切であると思っている。しかし話を聞けても、今は「そうですか」以上の言葉は出てこないかもしれない。それでも、患者さんやさまざまな作品や他者の人生から、困難の乗り越え方や感情を学び、すべてを積み重ねていつか患者さんに優しく言葉をかけながら、苦しみから引っ張り上げられる医師になりたい。そして再び訪れる家族の死に対して、次こそ後悔を残さないように、家族の健康にも責任を持てる医師になりたい。

3）私の出産エピソード

「生と死」と聞いて、私は2年生時の自身の分娩を思い出しました。予定日まであと1カ月という時、妊娠高血圧症候群と診断されました。すぐに教科書で調べ、母体死亡や周産期死亡の主な原因であることを知りました。自分の体の中にもう一つの生が存在するという神秘的な現象の一方で、自身の生が脅かされているような不思議で不安な気持ちでした。

前期破水し陣痛が始まった時、全身は浮腫み、収縮期血圧は200mmHg、尿蛋白は4+で、三次救急病院に搬送されました。陣痛が始まって13時間後、「胎児心拍落ちています」との看護師の声が聞こえた後に、吸引分娩で胎児が娩出されました。泣き声は聞こえず、Apgarスコアは3点（重度新生児仮死）でした。朦朧とした意識の中、10カ月お腹の中で大切に育ててきた我が子の死が頭をよぎりました。

幸いにも、小児科医の対応でApgarスコア5分値は9点で一安心しました。会陰切開等の処置を終え、一日経っても私の意識は朦朧としていました。翌日にHbが5g/dLとなり、輸血と出血部位の検査が行われましたが、何とかことなきを得ました。正反対にあると思っていた生と死をこれほど間近に感じたことはありません。生と死は隣り合わせにあって、私自身も人を生かし、同時に色々な人に支えられて生かされていることを実感しました。

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告

（アーカイブス：2014年度5年生A班）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

写真：A班実習時の記念写真（2015年1月）
後列：川瀬、江口、本田、洞庭、筆者
前列：中川、野口、下川、稲畠

本稿では2014年度5年生A班だった中川麻貴子さん、洞庭葉子さん、稲畠有規さんのレポートを紹介します。（写真）

1）生きた証：苦境から得たものを昇華すること

私の親族は広島出身で、遠縁に日本画家の故・平山郁夫がおります。彼は子供の頃から絵を描くことが好きで、仏像や神社仏閣ばかり描いていました。昭和20年8月6日、中学３年生の時に広島市での勤労動員の作業中に被爆しました。地獄のような広島市内をさまよい、家に辿り着いた時の光景を後に描いたものが「広島生変図（広島県立美術館蔵）」です。街を焼きつくす業火の渦巻く中に憤怒の形相で不死鳥のように立つ不動明王が描かれます。15歳の少年には忘れがたい地獄絵図だったのでしょう。

彼はシルクロードや仏教を主題にした画家ですが、紛争で危機にさらされる文化財保護にも尽力しました。その根底にあったのが被爆体験であり、「私は生かされた人生だから、なんとかお返しをしなければと思いました、私の一番の目標は平和への祈りです、創作と行動を通じてこの目標を生涯かけて実行しようと考えています」と語っています。

アートとは、生と死の地獄を見た者の心の叫びを具現化し昇華したものであると感じました。私たち医学生も近い将来に医師となり、生と死の狭間を垣間見ることになります。生と死が交差する現場で、避けられない死を実感し無力感を感じた時に、どのように乗り越え昇華することができるかを考え続けることは、医学の修得と同時に重要なことであると思います。そしてそれを日々出会う患者さんや家族や医療者仲間に還元することが、私たち医療者のアートであり、生きた証を残すことだと思うのです。

2）わたしを離さないで（カズオ・イシグロ）

介護人キャシーが語ります彼女は幼いころからヘールシャムという全寮制の学校で育ちました。ここは臓器提供のために作られたクローン人間を教育する施設でした。クローンは学校を卒業した後、臓器提供者の世話をする介護人になり、数年後には自身も臓器提供者になり、30歳前にほとんどのクローンがその使命を終えます。

キャシーの恋人トミーもクローンであり、すでに3回の提供を行っていて次の提供で使命を終えるかもしれません。キャシーとトミーは「愛し合うカップルは、提供を3年間猶予される」という噂に望みをつなぎ、学校長のもとを訪れます。しかし、無慈悲にも噂は否定され、猶予はなりませんでした。その後にトミーは最後の臓器提供を行い、使命を終えました。キャシーはそれを見届けた後に、提供者となり、二人とも粛々と自分に課せられた運命に従いました。

私は初めてこの作品を読んだ時、あまりにも彼らがやすやすと運命を受け入れたことにがっかりしました。しかし再度考えると、逃れられない運命の中で、人が何を大切にして人生を過ごすのかを作者は提示しているのだと気がつきました。我々もクローンも死を避けられないのは同様です。その時に、人はどのように自身を受け入れるのかを考えさせられる作品です。

3）草間彌生の詩「永遠の永遠の永遠」

私が人の生と死を考える契機となったのは、大学時代の友人の自死でした。私は自死が誰にでも訪れうることだと思い知らされました。どうしたら自死を止められるのかという疑問に対して、答えは出ません。今回の発表では、死を意識するほどの苦境をどうしたら生きられるのかを、表題の作品から考えました。

草間彌生は長野県出身で、現在85歳の前衛芸術家です。彼女の作品では、水玉や網目などの単純なモチーフが繰り返し使われることが特徴的です。この作風の原点は、10歳頃から続く恐ろしい幻覚にあります。家族や周囲から理解されず、孤独な少女時代でした。このような背景から、10代から現在に至るまで希死念慮を持ち続けています。死を意識するほどの絶望の中で、どのように生きようという思いを強く持ち続けているのでしょうか。

彼女は多大なエネルギーを注いで「死の恐れ、あこがれ」と対峙して「生きること」への希望を見いだしています。「人生をかけてやりたいこと、目的、生きがい」を持ち、そして「超越した存在との出会い」から、自己の存在のすばらしさに気づき、自己を肯定的に捉えています。また、「命のかぎり闘っていきたい」という信念を持っています。彼女は特別な人なのかもしれませんが、もしかしたら誰にとっても「生きがい」「宗教的な出会い」「自己肯定感」「信念」といったものが生きる希望へと繋がるのかもしれないと思いました。

十全昔話

金沢から自然豊かな福島へ 東日本大震災・原子力発電所事故を経験して

寺田　督
（昭和43年卒業）

大学病院構内を紫苑色風呂敷包みを小脇に抱え、大股で歩く先生を見掛け、臨床系の先生と異なる雰囲気を感じた。この印象が残っていた。後に産科婦人科西田悦郎助教授であったことを知りました。昭和43年（1968）に卒業、この年、インターン制度が廃止され、卒業後すぐに医師国家試験がありました。金沢大学附属病院で1年間研修し、産科婦人科に入局しました。西田助教授は留学中でした。入局後、関連病院で1年間の研修があり、この期間に産科学を勉強しました。教室に戻ってから、先輩の研究手伝いをさせていただき、細胞診は癌診断の一方法の意義以外に、ホルモン背景を推察しえることを知りました。

赤須文男教授が退官し、1971年6月に西田悦郎先生が後任に決まりました。西田教授は、患者の人権、現在話題になっている性同一性障害について話されたことを思い出します。私は、研究したいと思っていました。教授が病理での研究の話をされ、すぐ病理へ行かせてくださいと伝えました。教授は第一病理学講座梶川欽一郎教授の了承を得たので、産科婦人科を完全に離れ、3年間、第一病理学講座の一員として、病理学講座の業務、研究をしなさいと話され、3年後、病理学教室に迎えに行くと言われました。病理へ移る前に、西田教授が電子顕微鏡に関して勉強しなさいと言われ、日立製作所研究所へ、教授と一緒に行きました。

1972年3月より第一病理学講座に移りました。病理では、教室業務、病理解剖、研究と充実した日々を過ごしました。3年間経過し、学位を仕上げ、死体病理解剖資格を得ました。西田教授が迎えにこられ、産科婦人科に戻りました。手術に関して3年間のブランクがあり不安でした。教授は大塚の癌研究会附属病院婦人科部長増淵一正部長に連絡され、研修に行きました。その後、手術助手として経験を積みました。いつものように、子宮頚癌手術の準備をして待っていると、執刀医教授が入ってこられ、突然、本日の手術は私に執刀しなさいと言われ、手術室隅の椅子に坐りました。初めての手術執刀をしました。手術終り近くなり、教授は初めて手術野をみられ、これから癌手術は君がしなさいと言われ、以後、手術に入られませんでした。手術終了まで、椅子に坐り、手術野を見ることなく、

静かに坐っていた姿に感動しました。研究室で実験しているとき、教授が入ってこられ、自由な時間ができたから、手伝しますといわれ大変恐縮しました。夜遅くなる日々が続き、宿直の日に、教授が研究できるのは、家族の協力あってこそだから、教授が宿直するから帰りなさいと言われ、帰宅しました。学会のため大学の留守番していた時、学会より帰学され、岐阜での学会のお土産といわれ、刀鍛冶で有名な関市の爪切りをいただきました。この爪切りは、現在も使用しています。教授から学問はもとより、学問以外の多大なことを教えられました。西田教授が退官され、1998年9月、自然豊かな福島市で開業しました。福島市は山々に囲まれた盆地で海抜約65m、福島第一原子力発電所（原発）から約67㎞離れています。自宅から吾妻小富士（標高1707m）噴火口、一切経山（標高1949m）の噴煙を見ることができます（写真）。早朝硫黄の臭いがします。5月にはカッコー飛来し、裏道に狸が出没し、前方の畑にキジが住みついています。

2011年3月11日（金）午後2時46分、三陸沖大地震（マグニチュード9）により、東日本大震災が発生しました。診察後でした。福島市は震度6弱で、停電、断水となりました。戸棚は倒れ、カルテ・書籍は散乱し、ガラス・自作の陶器も破損散乱しました。ガス漏れ点検し異常なきことを確認しました。テレビは映らず、原発事故に関して知りませんでした。3月12日（土）休診。飲料水、食料買い出しのため、コンビニエンスストア、スーパーマーケットへ行きましたが、長蛇の列を作っていました。3月13日（日）日曜当番医。停電中であり、蝋燭を燈し、懐中電燈使用して診察しました。午後10時原発第3号機水素爆発3月15日原発第2・第4号機水素爆発（放射能放出量19万ベクレル、INEAの最悪評価レベル7）。福島市は原発から約67㎞離れ、阿武隈山地が防護壁となり、放射性物質は飛来しないと考えていました。しかし北西の強風に乗って、高濃度放射性物質が福島市に飛来しました。患者の放射性汚染不安軽減のために、院内に“放射線とは”“日常生活で受ける放射線”などの掲示を出し、さらに患者の不安ある場合は相談時間を設けました。空間放射線量は時間経過につれ減少し、2011年3月15日4.24μSv/h、2012年3月0.76μSv/h、2013年7月0.33μSv/h、2022年12月24日0.11μSv/hと減少し、原発事故以前の0.03～0.04μSv/hに近づいてきました。患者から汚染不安訴えを聞かなくなりました。しかし、原発事故以前に比して、福島県人口約2万人も減少しました。原発事故により、帰還困難区域が発生し、この区域は福島県総面積2.7％（約370㎢）で、名古屋市とほぼ同じ面積に相当します。放射性汚染土壌処理、多量の汚染水、処理水保管場所確保そして多量の処理水の海洋放出などの問題が山積となっています。原発は海抜ゼロメートル地帯に建てられていたことも問題でした。原発事故被害額8972億円ともいわれ、廃炉には30～40年かかり、原発処理総費用は40年間に30兆～80兆円かかると試算があります。原発事故直後、脱原発気運が高まり、クリーンエネルギーへの転換が必要といわれていた。しかし原発事故から12年経過し再び原発再稼働へ動き出しています。

Vows made in storms are forgotten in calms.

旧医学部の正門の写真一葉

宗　瑞照
（昭和25年専門卒業）

私は終戦後の昭和二十五年に専門部を卒業し、今年で九十七歳になるものですが、卒業後に母校からいただいた懐かしい写真が一枚でてきましたので何かのお役に立てばと思いお送りいたします。

私たちの卒業の頃は食糧難で、栄養失調症やダイアビーティスの患者が多く、恋もデートもないゆとりのない時代でした。

それでも歯を喰いしばって勉学に励み、人並みに開業して、妻にも恵まれ、現在は名古屋に邸宅を構え十分な余生を送っています。

私たちの入学は昭和二十年でしたが、入学するとすぐ先輩の自称応援団長が現れて「只今から金沢医科大学の校歌を教える」と蛮声を張り上げて伝受してくれた。校歌といえば室生犀星の「天うつなみけぶらい」が有名で、旧制校歌は耳にしないが、朧げながら記してみます。題名は「伝統」でした。

紫雲たなびく東（ひんがし）に
白峰の雪色映えて
独り晨（あした）を誇るとき
夢みる花に雫して
神の粂吹（いぶ）きは濟生の
崇き使命を傳ふるか

金沢大学医学部正門

私は四十歳頃から、水原秋桜子の「馬酔木」に入門して俳句を始め、名古屋から金沢へも吟行によく出かけましたので、記してみます。

金沢春景

卯辰山小立野と朝霞みけり
黒瓦つらなる街や風光り
辰巳用水地下を流るる初桜
落椿つまづきゐしが流れそむ
出揃ひて水に一寸（いっすん）かきつばた
曲水をのぼりつめたる蜷（にな）の道
水亭の障子真白に春の風
池の水落ちて奏（かな）づる春の滝
芽の柳揺れて北指す浅野川
大学の門山茱萸（さんしゅゆ）の黄を懲（こ）らす

四十歳の頃。兼六園を訪ねて雁行橋を踏む。

最近は歩行が不十分で、旅行に行けず残念ですが、頭の中で俳句はしております。

「白寿」の金杯を受け取る日も近くなりましたようなので、母校の恩恵をありがたく思い、お便りさせていただきました。これからも母校の発展と同窓諸氏のご健勝を祈り上げ、筆を措きます。

初日の出我が終焉の地を照らす

（令和5年1月1日）

学生コーナー

寄り添うということ

医学類４年
西村　美紗

「病院実習が始まり、初めは不安でしたが、先輩医療従事者に指導してもらい、患者さんとのコミュニケーションを通じて成長を感じています。さまざまな診療科目で経験を積めることは貴重ですが、臨機応変な判断力やコミュニケーション能力が求められることも感じています。」

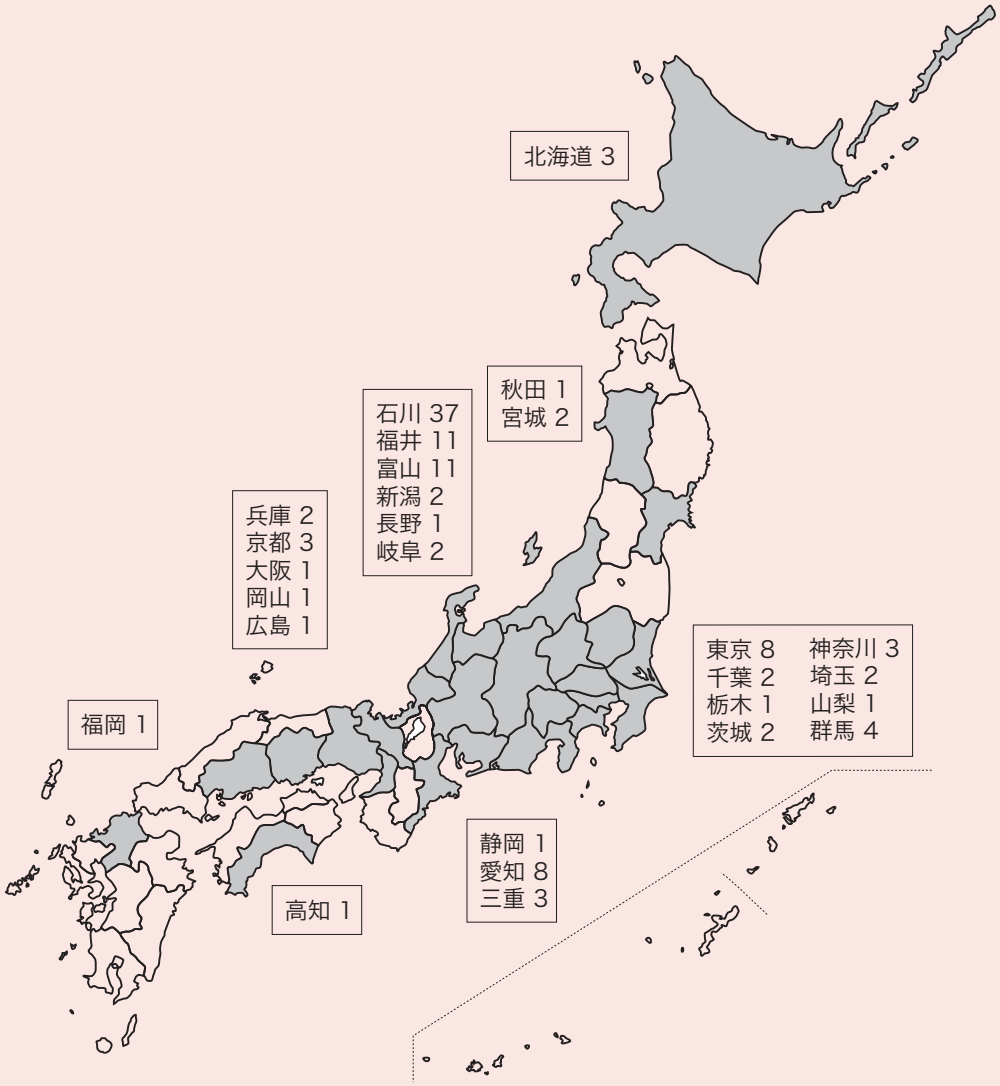
唐突になんの話だと思われるかもしれないが、これは『タイトル「病院実習が始まって」という医学生のコラムを短く書いて』という要求に従って、ChatGPTというチャットサービス、いわゆるAI（人工知能）が書いたものである。ChatGPTとはOpenAIという企業によって開発された、ユーザーが入力した質問に対してまるで人間のように自然な対話形式でAIが答えるチャットサービスである。2022年11月に公開され、幅広い分野の質問に詳細な回答を生成できることからSNSなどで話題になっている。締め切り１週間前になってもこの原稿が書き終わっていない現実に絶望し、いっそこいつに任せてしまおうかという学生の風上にも置けない思考から利用したが、あまりの自然さと学習能力の高さに夢中になりさらに時間を浪費してしまった。ChatGPTで遊びながら、つい最近の病院実習で「きみが現場でバリバリ活躍する頃には心電図の読影も画像診断も全部AIがやってくれるようになるんだろうねぇ」と指導医の先生に言われたことをふと思い出した。今までも授業や実習でたびたび言われてきたことだ。この話題に加えて、AI、またはロボットなどのテクノロジーが我々の仕事を手助けし、奪った先で、医師に残る仕事とは…という課題もよく問われる。その答えの一つは、患者さんに向き合い寄り添う、なのだが、これも今までも言われてきたことだ。私も、病院実習に参加する前からそれが答えの一つであることを理解はしていたし、医療者はそうするものだとなんとなく思っていた。が、病院実習始まってすぐの実習先の病院でその言葉の意味とその難しさを実感した。

私の初めての受け持ちの患者さんは、失語症の方だった。初めての病院実習だったということもあり、自分なりにいろいろ試行錯誤して上手くいかないことにもどかしさを感じる日々だった。最初は不安そうな表情を見せていた患者さんが、会いに行くにつれてリラックスした表情になったのがすごく嬉しかったのを覚えている。失語によるコミュニケーションの難しさが、どうやったら患者さんに寄り添えるのか、心を開いてくれるのかをより深く考えるきっかけの一つになったように思う。この患者さんの診察の際に特に私が意識したのは、表情やジェスチャーだったが、これはAIやロボットにはできないことだ。顔のパーツやしわの位置を学習して相手の感情を予測するような技術は既にあるかもしれないが、当事者意識をもって誠実に相手と接することができるのは人だからできることだと思う。また、どの病院でも、そんなに細かい部分まで考えるのか？と私の考えが至らない部分まで、看護師さんやコメディカルの方々のきめ細やかな気配りと患者さんに寄り添う姿勢があった。そういった姿勢が患者さんのさまざまな不安を取り除いたり、処置を円滑に行うのに大切なのだと学んだ。

現在の医療AIの分野は、画像認識、診断支援事務効率化、創薬、オンライン診断など幅広く、診断精度の向上、患者のデータ管理の効率化などに貢献すると言われている。多くの病院が活用している「da Vinci」のような手術支援ロボットや、歩行支援をする介護ロボットなど、マルチタスクな医療者の負担を減らしてくれる素晴らしい技術だ。しかし、人が人を診る現場では医療者の手と目、その姿勢に代わるものはないということを病院実習を通して実感することができた。まだ実習は続いていくが、この数ヵ月で感じたものを生かせるように勉強に励んでいきたいと思う。

令和5年3月卒業者進路

令和５年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調査



連絡先の変更・ご異動の際は、金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトをご活用ください

URL　http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member

会員情報変更はこちら

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL：076-265-2132
Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

寄附制度のご案内(金沢大学医学教育研究支援寄附金)

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

【担当(お問い合わせ先)】

〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類Ｂ棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

・ 電子メール又は電話でのお申込み
上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

・ 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。(※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。)
・ 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

年額4,000円

①自動引き落とし（手数料本会負担）

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

＊ゆうちょ銀行は2022年1月より手数料を新設しました。
現金による払込みにつき、1件ごとに110円の手数料がご依頼人にかかります。

③銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

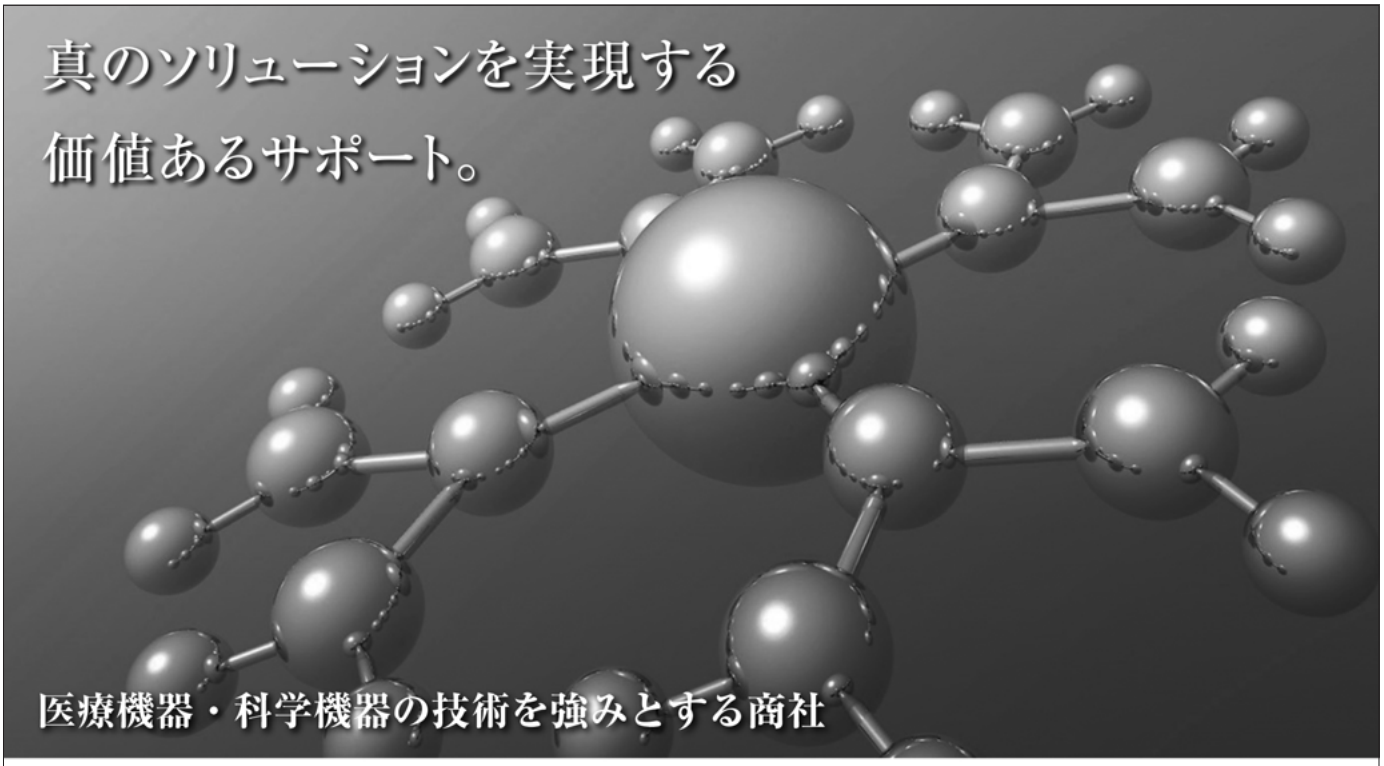
（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）

北陸銀行　小立野支店

普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



明日の健康と新産業創造のパートナー
丸文通商株式会社

〒920-0385 石川県金沢市松島一丁目40番地
TEL 076-269-1880 FAX 076-269-2522
http://www.marubun-tsusyo.co.jp/

Powered by
Edison

A CT SCANNER THAT LOOKS OUT FOR YOUR PATIENTS.

That's Intelligently Efficient.

医療現場のニーズに応え続ける。

GEヘルスケアのRevolution™ Maximaは、Deep Leaning※技術を搭載したCTで、最適な撮影ポジショニングを自動解析・調整します。
低被ばく高画質といった臨床的なメリットに加え、ワークフローの簡素化により、安全で質の高い検査をサポートします。
GEヘルスケアのテクノロジーの実装を通じて、多様化する医療現場のニーズに応え、患者さんのために最善を尽くします。
詳しくは、gehealthcare.co.jpをご覧ください。

Revolution Maxima（レボリューションマキシマ） 医療機器認証番号：301ACBZX00013000
※Deep Learningは製品開発に用いられており、納入後に学習し続ける技術ではありません。
JB03625JA

PSP

医療情報クラウドが、
現場を変える。

AIもセキュリティも、医療情報クラウドで。

医療情報・画像データ等を安全に管理するクラウド機能からAIによる診断支援まで、クラウド型
PACS NOBORIのセキュアなネットワーク機能が、これからの医療を支えます。

NOBORI

PSP株式会社　〒108-0075 東京都港区港南1丁目2番70号 品川シーズンテラス25階　www.psp.co.jp

PSPと NOBORIは2022年に合併しました。

劇薬、処方箋医薬品注)　薬価基準収載

注) 注意ー医師等の処方箋により使用すること

甲状腺ホルモン製剤

チラーヂンS®静注液200μg

THYRADIN®-S I.V. INJECTION

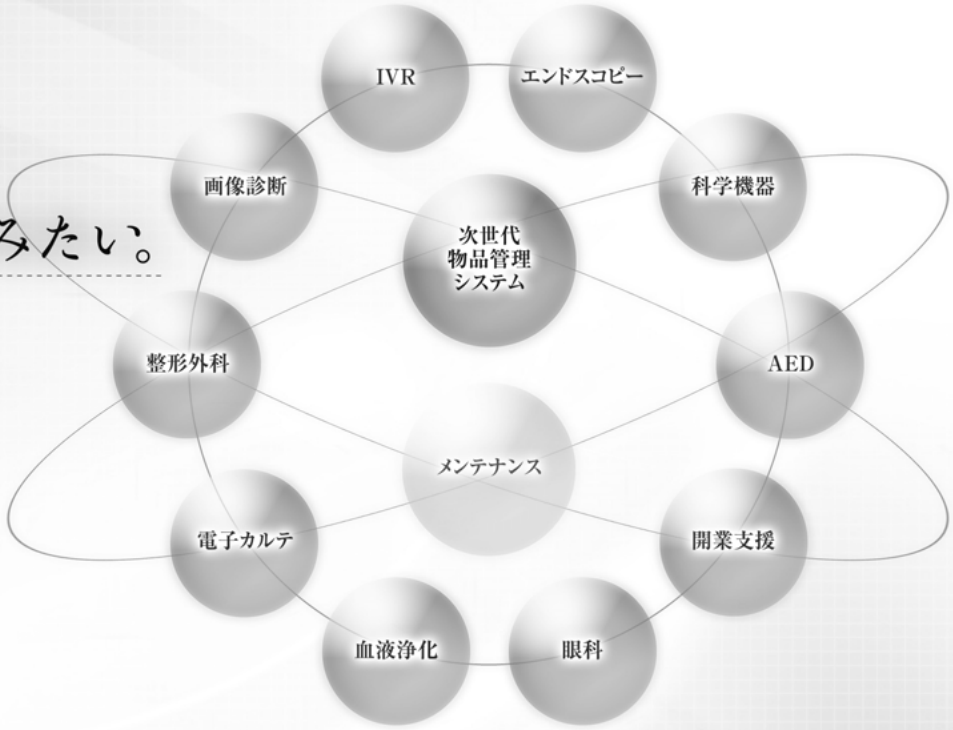
■効能又は効果、用法及び用量、禁忌を含む使用上の注意等については電子添文をご参照ください。

製造販売元[文献請求先及び問い合わせ先]
あすか製薬株式会社
東京都港区芝浦二丁目5番1号

販売元
武田薬品工業株式会社
大阪市中央区道修町四丁目1番1号

2021年9月作成

医療とともに
大きな夢を育みたい。



富木医療器株式会社
http://www.tomiki.co.jp

本社　〒920-8539 金沢市間屋町2-46　TEL(076)237-5555(代)　FAX(076)237-6584
支店　金沢・富山・福井　　営業所　七尾・高岡

nihon medi+physics

for the happiness

SPECT 診断 PET
核医学
治療 医療機器

明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)
https://www.nmp.co.jp/　日本メジフィジックス株式会社
2023年4月作成

X線CT装置
NAEOTOM Alpha
with Quantum Technology
CT redefined.

www.siemens-healthineers.com/jp

SIEMENS Healthineers

全身用X線CT診断装置　ネオトム Alpha　　認証番号：304AIBZX00004000

NOVARTIS

新しい発想で医療に貢献します

ノバルティス ファーマ株式会社
http://www.novartis.co.jp/

十全同窓会 会員の皆様へ

団体 会員総合補償制度 募集開始のご案内

（正式名称：団体総合生活保険）

金沢大学医学部十全同窓会では近年厳しさを増す医療訴訟の防衛策として、また会員の福利厚生の充実を図るため、「会員総合補償制度」をご用意いたしました。多くの同窓会員にご加入いただくことで、スケールメリットを活かした団体割引が適用され、魅力ある制度になります。

保険開始は2023年9月1日ですが、本年から募集を開始いたしましたので、この機会に是非ご加入をご検討いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

金沢大学医学部十全同窓会

募集商品のご案内

- **■医師賠償責任保険** ・・・万一の医療事故による高額補償への備えとして
- **■所得補償** ・・・病気やケガで働けなくなった時の備えとして
- **■団体長期障害所得補償** ・・・長期間働けなくなった時の備えとして

まずは専用パンフレットをご覧ください。

ご加入手続き
資料請求は
こちら

PCの方、2次元コードを読み取れない方は

URL https://www.pioneerltd.com/juzen/

もしくは 十全同窓会　パイオニア で検索!

保険期間：2023年9月1日(金)午後4時～2024年9月1日(日)午後4時

【お問合せ先・取扱代理店】

PIONEER 株式会社パイオニア

Tel: **0120-36-8442** (平日 8:45～18:00)
https://www.pioneerltd.com　メール　sraff@pioneerltd.com

この広告は医師賠償責任保険、団体総合生活保険の概要についてご紹介したものです。保険の内容はパンフレットでご確認ください。また、ご加入にあたっては、必ず重要事項説明をよくお読みください。詳細は団体代表者の方にお渡ししてあります保険約款および特約によりますが、ご不明な点は取扱代理店または引受保険会社へお尋ねください。

【引受保険会社】 東京海上日動火災保険株式会社人部 Tel: 03-3515-4143 (平日9:00～17:00)

2022年12月作成　22-TC●●●●

会報編集委員の紹介

学内編集委員（14名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
佐々木素子
篁　　俊成
和田　隆志
杉本　直俊
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（21名）

山口　成良
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上35名で構成されています。

表紙の写真

春を彩る草花

例年になく早い桜の開花後も、宝町キャンパスではマグノリアやドウダンツツジなどの草花が開き、春を華やかに彩りました。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：**金沢大学医学部十全同窓会**
会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町 13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和 5 年 5 月 21 日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

2020年1月から３年間に及ぶコロナ禍が明けようとしています。世界中で猛威をふるったCOVID-19感染症は、５月の連休明けに感染症二類から五類に引き下げられます。コロナがなかったらweb活用ツールがこれほど早急に発展することはなかったでしょう。コロナ禍は人間社会を大きく進歩させたのかもしれません。一方で、人間関係の形成には実際に会って、お互いの目を見て話す対面が基本であることを知る機会にもなりました。ポストコロナではwebを適度に有効利用する新たな社会生活が待っています。コロナ禍で開発されたさまざまなシステムを活用して、我々は来年の４月から始まる「医師の働き方改革」に備える必要があります。

気になるのは、医学部学生にとっての長期的な影響です。医師はさまざまな人と密接に関わり合い、円滑な人間関係を構築することが必要です。多感な学生時代は、人の多様性を知りながらさまざまな人との付き合い方を学ぶ期間でもあります。本来活発に行えるはずであった、青春を謳歌する活動に制限がかかり、人を学ぶ経験値が少なくなったとすれば、その影響は後から出てくるのかもしれません。

十全同窓会会報は、普段はお会いできない同窓会会員同士の心のつながりを育む非対面型のコミュニケーションツールです。これを毎号楽しみにしている会員の先生も多いのではないでしょうか。私もその一人です。十全同窓会の皆さまのご健勝とご多幸をお祈りいたします。

（中田　光俊：記）